TOGARIISHI SITE

# 尖石遺跡

――平成14年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書――

2003.3

茅野市教育委員会

TOGARIISHI SITE

# 尖石遺跡

——平成14年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書——

2003.3

茅野市教育委員会

# はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

永年、地権者の皆さんや地元の人々の理解と熱意によって、保存されてきましたが、近年の開発はついに尖石遺跡の周辺にも及んできました。そこで茅野市では、このすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に受け継ぐべく昭和62年度から国・県のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行い、平成２年度からは引き続き記念物保存修理事業（環境整備）に着手いたしました。

記念物保存修理事業（環境整備）の一環として行われている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成していく上での基礎的な調査として実施されているものであります。

その試掘調査も、今回で10回目となりました。平成10年度には、隣接する地にある尖石考古館の新築開館にあわせ、新たに国の特別史跡に追加指定された、従来与助尾根遺跡と呼ばれていた地区の調査も行っています。また、試掘調査に併せ、平成11年度には与助尾根地区のニセアカシアの伐採、復元住居の取り壊し、園路整備を行い、平成12年度には同じく与助尾根地区での復元住居６棟の建設、172本の落葉広葉樹の植栽を行い、史跡公園として整備を尖石地区に先行して行いました。

試掘調査は、その後も継続して行っており、平成13年度には尖石遺跡の南側の試掘調査を行いました。この地区は、宮坂英弐氏も調査を行っていない箇所であり、これまでの周辺の試掘調査の結果からも、多くの遺構の検出が見込まれるところでしたが、予想を遙かに上回る遺構の検出がありました。

今年度は、昨年の試掘調査の継続と、考古館の西側に当たる斜面の試掘調査を行っています。

こうした調査成果をふまえ、今後の史跡整備に一層の努力をして参る所存でありますので、皆様の一層のご協力をお願いいたします。

最後に、この事業の実施にあたってご指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成15年３月

茅野市教育委員会

教育長　両角　源美

# 例言・凡例

1．本書は、特別史跡尖石石器時代遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書である。

2．試掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。

3．試掘調査は、平成14年７月９日から10月31日まで行った。

整理作業は、平成14年11月１日から平成15年３月27日まで行った。

4．出土品の整理及び報告書の作成は、尖石縄文考古館で実施した。

本報告書に係る出土品・諸記録は、尖石縄文考古館に保管している。

5．本報告書の執筆は、小林深志が行った。

6．調査の体制

本調査は茅野市教育委員会が実施した。組織は以下の通りである。

特別史跡尖石石器時代遺跡整備委員会

特別委員

坪井　清足（財団法人元興寺文化財研究所所長）

専門委員

戸沢　充則（尖石縄文考古館名誉館長・明治大学名誉教授）

清水　　擴（東京工芸大学教授）

土田　勝義（信州大学教授）

亀山　　章（東京農工大学教授）

宮坂　光昭（長野県遺跡調査指導委員）

小平　　学（学識経験者）

指導助言

本中　　眞（文化庁文化財保護部記念物課主任調査官）

矢澤　威彦（長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課課長）

調査主体者

両角　源美（教育長）

事務局

伊藤　修平（教育部長）

小平　廣泰（文化財課長）

鵜飼　幸雄（尖石縄文考古館長・史跡公園係長）

調査担当

小林　深志（尖石縄文考古館学芸員）

発掘調査・整理作業協力者

牛尼チトセ　　太田　義明　　北沢　もと　　北沢　祐子　　北沢　洋子　　久保田きみ子

栗原　　昇　　小平千恵子　　小平フサ子　　武田ケサ子　　東城久美子　　長田　　真

山崎　裕子　　渡辺　郁夫

# 目　　次

はじめに　　茅野市教育委員会 教育長　両角源美
例言・凡例
目　　次

第１章　調査の目的……1

第２章　調査の方法と経過……2
　第１節　調査の方法……2
　第２節　調査の経過……2

第３章　遺構と遺物……5
　第１節　調査区の概要……5
　第２節　検出された遺構……27

第４章　ま　と　め……35

図　　版
抄　　録

# 第１章　調査の目的

茅野市教育委員会では、平成２年度から国庫及び県費の補助を受け、尖石遺跡整備のための事前の遺構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、尖石地区の南側と考古館の西側である。この地区は、どちらも宮坂英弐氏が全く調査を行ったことのない箇所である。ことに尖石地区の南側は、これまでの試掘調査の成果からも、縄文時代中期前半の集落と後半の集落の接点となっている箇所であり、多くの遺構の検出が予想されるところであった。また、今後の尖石遺跡の整備を進めるにあたって、復元する住居の選定や仮設してある園路の設計に欠かせない重要な地点でもある。

また、考古館の西側は、与助尾根地区との間の谷に向かう北斜面で、中には湧水もあることから、水場などの特殊遺構の検出や、木製品などの台地上では出土の機会のない遺物の出土に期待が持たれた。

この重要な地点の調査を行うにあたって、これまでの遺構の位置とプランを確認する作業、さらに遺構の時期を確認するための若干の上層の掘り下げだけでは、かえって遺構を破壊するだけになってしまうとの考えから、計画したグリッドの中は徹底的に調査を行い、遺構の性格を調査することとした。

# 第２章　調査の方法と経過

## 第１節　調査の方法

特別史跡尖石遺跡は、指定地の用地購入が終わった翌年の平成２年度から、記念物保存修理事業（環境整備）のため継続して試掘調査が行われ、今年度で10回目を迎えることとなった。過去９回の調査については、それぞれ試掘調査報告書が刊行されている。

平成２年度に試掘調査を開始するにあたって、尖石遺跡全体を大きく４つに分け、北西隅をⅠ区とし、時計回りにⅡ区、Ⅲ区、Ⅳ区と区画の名称をつけている。その区画ごとに遺跡範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて大きく10m四方の大きな正方形のグリッドで区切り（大グリッド）、ｘ軸を大文字のアルファベット、ｙ軸を数字で呼称している。さらにその大グリッドを２m四方の小さなグリッド（小グリッド）としてｘ軸を小文字のアルファベット、ｙ軸を数字で表し、合わせてⅠ区Ａ１ａ１のように呼称している。

今回調査の対象としたのは、遺跡の南側ほぼ中央で、環状集落の南側の住居址が多数検出されるのではないかと考えられている地区である。調査対象面積は約2,000㎡、調査面積は1/5の400㎡を予定した。

掘り下げにあたっては、できるだけ少ない調査面積で住居址等の遺構の検出がすべて把握できるように、グリッドの間隔が４ｍを越えないように計画的に設定した。

## 第２節　調査の経過

調査は、昨年度に掘り残した遺跡の南側から行うことにし、７月９日から作業員を動員し、機材の搬入と掘り下げにはいる。

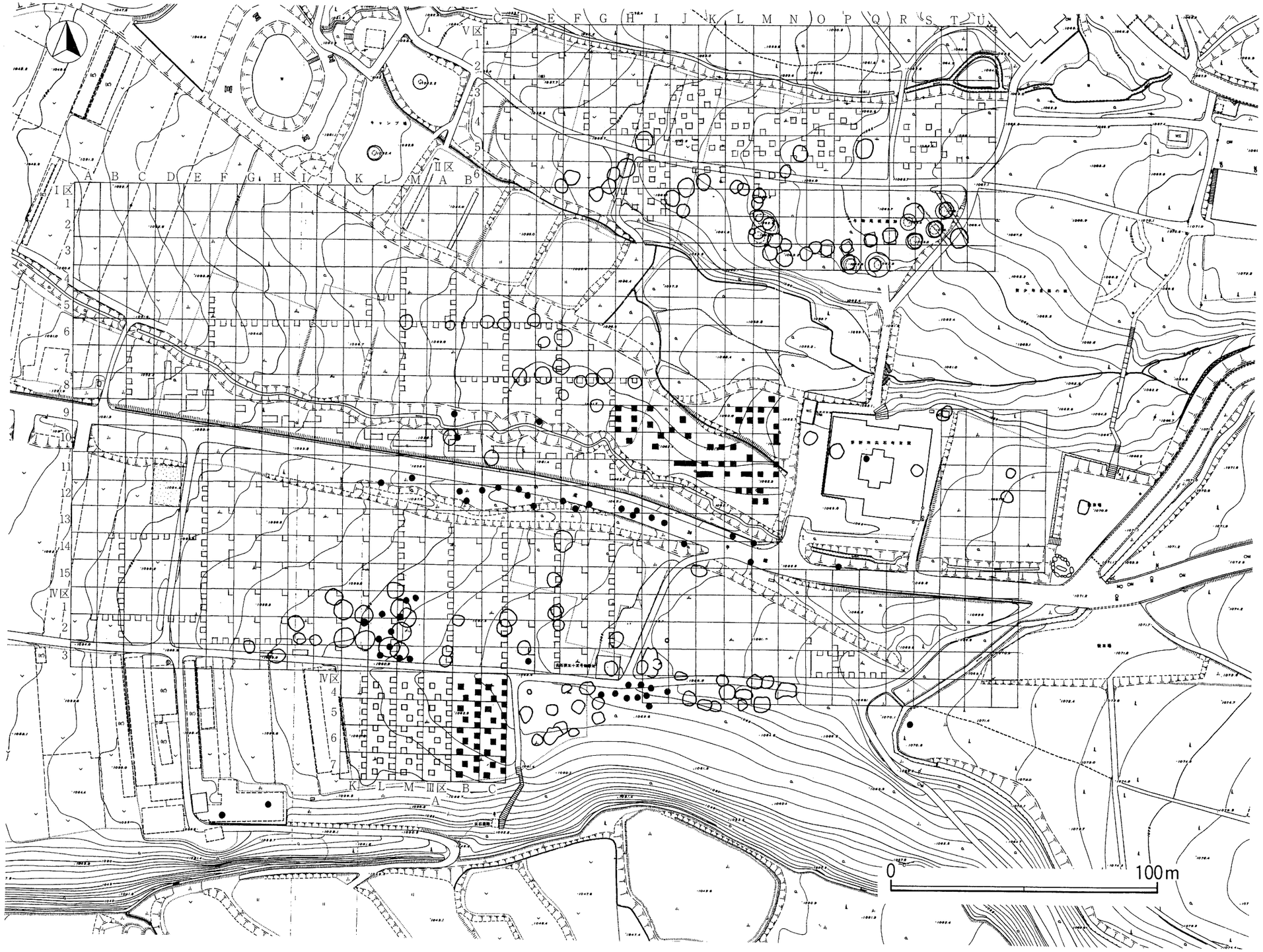
調査は、昨年度に調査区の設定を行ってあったため、直ちに調査区の掘り下げ、遺物取り上げ、遺構の完掘、実測作業と繰り返し行いながら進めていった。

考古館西側は、尖石地区南側の調査の進捗状況を見ながら、杭打ち作業と調査区の設定を行い、８月初旬には作業員の一部が掘り下げを開始した。

尖石地区南側は、昨年同様遺構の検出が多かったため、掘り下げと実測図の作成に時間を要し、すべてが終了し、埋め戻し作業を終えたのは８月の下旬に入ってからであった。

また、考古館西側の調査では、調査区の掘り下げに伴い、湧水の対策に苦労するようになる。当初ヒシャクやバケツによる水のくみ出しを行っていたが、調査箇所が増えるにつれて作業時間の多くを水のくみ出しに取られるようになったため、電動ポンプによるくみ出しを行った。それにより掘り下げに当てることのできる時間を増やすことができたが、夕方ポンプを止め、翌朝になって行ってみると調査区いっぱいに水がたまってしまうという状況で、作業は遅々として進まなかった。

発掘調査は10月31日までに掘り下げと図面作成を終了した。調査した箇所については埋め戻し工事として外部委託し、重機により行った。その重機による埋め戻し工事も11月９日には終了し、現地でのすべての作業を終了した。




第１図　周辺の地形と発掘区（1/1,500）

# 第３章　遺構と遺物

今回検出・確認した遺構は住居址と考えられる掘り込み、炉、周溝、平坦な床面等が確認され、確実に住居址と考えられるものが10軒あった。その住居址内にも、直接住居址に関係ないと思われる土坑、柱穴状の遺構が多数検出されたが、それらを除き、外側で検出された土坑や住居址の柱穴になるのではないかと思われるものだけで151基を数えた。

## 第１節　調査区の概要

### 尖石地区南側

ⅢＢ４ｂ３（第２図、図版２－１・２）

表土層を25cmほど掘り下げると、10cmほどの黒色土となり、その下がローム漸移層となる。北西側はローム漸移層がなく暗褐色土となるが、さらに掘り下げていくと柱穴などの遺構が検出される。北壁際中央の柱穴の覆土は、東側から南側にかけて、ロームブロックの非常に多く含まれる埋め戻した土層があることから、柱を立てた後に埋めたものであることが理解される。柱穴より東側にはローム漸移層がないが、ローム面も住居址の床面のような平坦さや硬さは見られない。この柱穴以外にも20cm前後の小さなピットがいくつか検出されているが、住居址などの遺構に伴うものとは考えられない。

ⅢＢ５ｂ２（第２図、図版２－３・４）

表土層を20cmほど掘り下げると、10cmほどの黒色土となり、その下がローム漸移層となる。調査区の北西隅で検出された遺構は、深さが50cmほどであるが、昨年度西側のⅢＡ４ｅ４、Ａ５ｅ１、Ａ５ｅ３で検出した中期中葉の大きな住居址Ｈ13－19と床面の高さが一致することから、その東端になるものと考えられる。

北東で検出した径１ｍの遺構は、深さが15cmほどで、ローム漸移層中に掘り込んだ痕跡がないことから、ローム面の凹凸である可能性もある。

東壁中央と南側で検出された柱穴状の遺構はどちらも深さが20cm足らずであるが、壁面や底面はしっかりしている。

ⅢＢ６ｂ１（第２図、図版２－５・６）

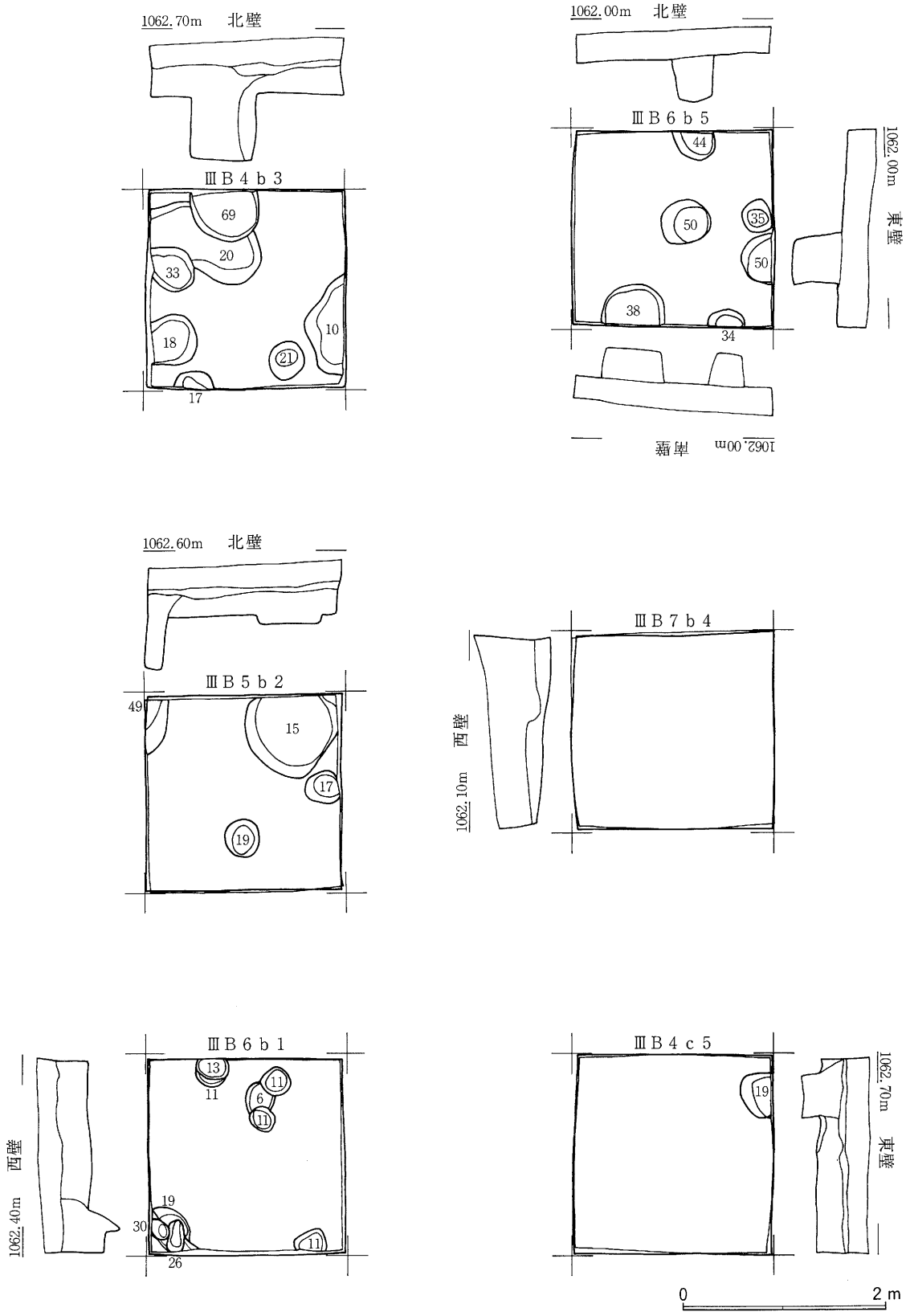
表土層を25cmほど掘り下げると、25cmほどの暗褐色土となり、その下がローム層となる。遺構は暗褐色土の上層で漠然と確認できる程度であったため、ローム面まで掘り下げた後に遺構の掘り下げを行った。

南西隅で検出された遺構は、周溝を伴っている。昨年度西側ⅢＡ６ｅ２で検出した住居址Ｈ13－22の北東端になるものと考えられる。他に径が30cm以下で、深さがローム面から６～13cmのピットが重複しているものを含め６基ある。

ⅢＢ６ｂ５（第２図、図版２－７・８）

30cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム面となる。ローム面は地形に沿って南へ傾斜している。北と南では14～17cmの比高差があるが、検出された遺構はどれもしっかりしたものである。南壁際西側の遺構は土坑になるであろう。他の遺構は、径は様々であるがどれも柱穴としてよいものである。

遺構分布図（第15図）では住居範囲からはずしてあるが、ⅢＢ６ｃ３で確認された住居址の大きさによっては、いくつかの柱穴がその住居址に伴う可能性がある。また、既に床や壁は削平されているが、別の新たな住居址のあった可能性も否定できない。




第２図　検出された遺構と土層堆積状態(1)（1/60）

ⅢＢ７ｂ４（第２図）

表土層を取り除くとローム層はなく、火砕流の層となる。大礫の混じる非常に硬い層で、遺構などは検出されなかった。

ⅢＢ４ｃ５（第２図、図版３－１）

20cmほどの表土層を取り除くと浅い黒色土となり、その下にはローム漸移層が続く。東壁際北側の遺構はそのローム漸移層を掘り込んでいる。径は45cmほどで深さはローム漸移層上面からでも40cmほどである。周囲にローム漸移層が堆積していることから、住居址などの遺構に伴うものではないと考えられる。

ⅢＢ５ｃ４（第３図、図版３－２・３）

20cmほどの表土層を取り除くと、同じく20cmほどの黒色土となる。北壁中央よりやや西から南西隅にかけてのラインの西側にはローム漸移層の堆積が認められるが、これより東側には暗褐色土が堆積し、その下は直ちにローム面となる。そのローム面を精査すると、北東から南西に向かう周溝が確認された。当初確認した暗褐色土の堆積するラインとは異なるが、この周溝とⅢＢ５ｅ５で確認された掘り込みが同じ住居（２号住居址）になると考えられる。

住居址の外側の、当初暗褐色土が確認されたラインは、周辺の調査区を見ても、これに伴うような遺構が検出できていない。ⅢＢ５ｅ３に、同じくローム漸移層のない箇所があるが、これに伴うとすると、かなり大きく、しかも不整形な遺構となってしまうので、現時点では遺構外としておきたい。

本調査区からは、住居址と確認された範囲の中だけでなく、周溝上あるいは住居外と考えられる箇所にも柱穴状の遺構が検出されている。特に中央の周溝上にある遺構は、柱痕と考えられる外側にロームブロックを充填したもので、明らかに柱穴である。

ⅢＢ６ｃ３（第３図、図版３－４）

20cmほどの表土層を取り除くとローム漸移層となるが、南側には住居址と考えられる掘り込みがある。床面まではわずか10cmほどであるが、一部に周溝も認められる。住居址の外側にもいくつか柱穴状の遺構がある。深さは浅いもので７cmほど、深いものは62cmを測る。これらに伴う住居址と考えられるような大きな遺構は、周辺の調査区では確認されていない。

ⅢＢ７ｃ２（第３図）

25cmほどの表土層を取り除くと、直ちに硬いローム層となる。本調査区からは遺構も検出されず、遺物も出土しなかった。

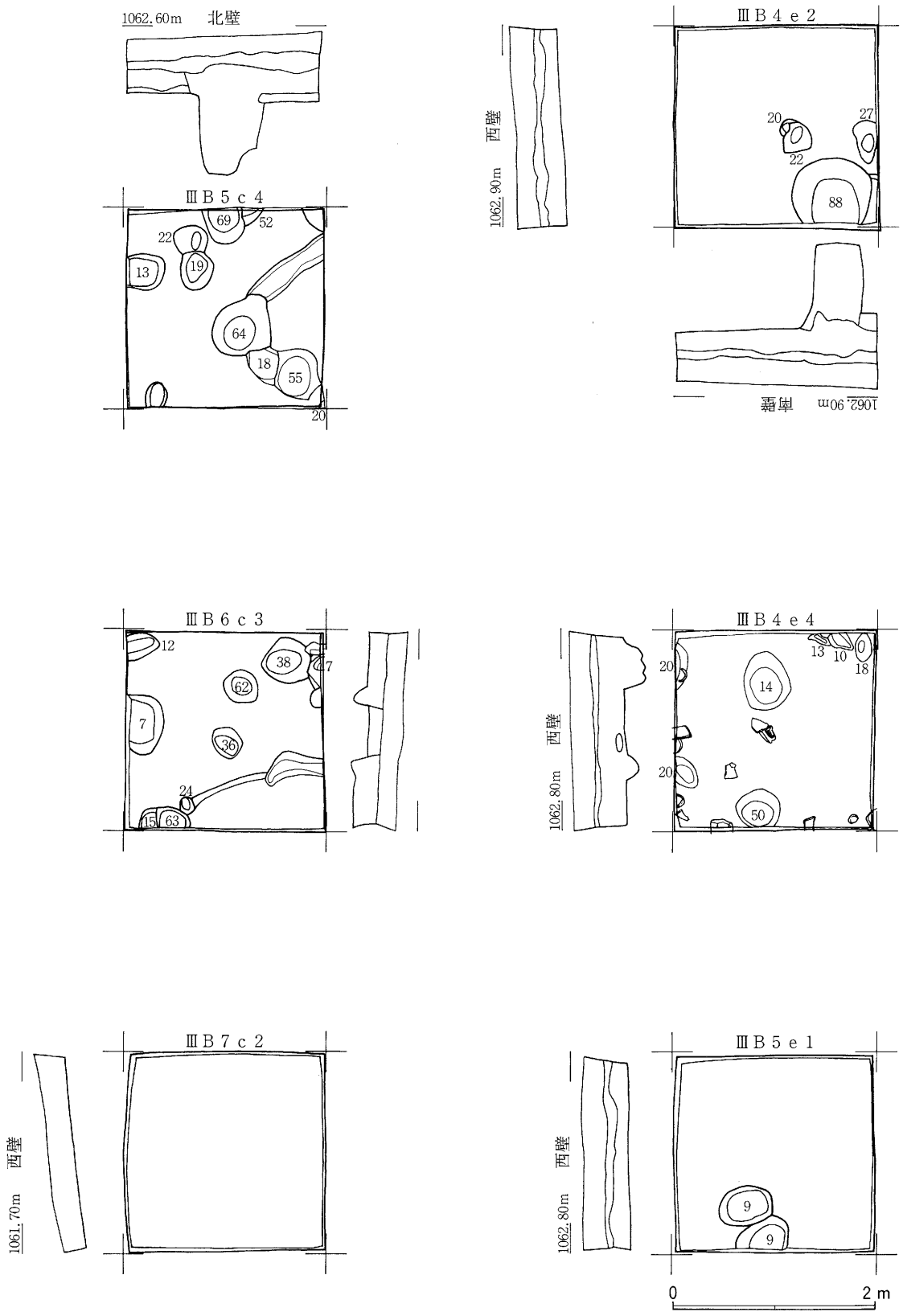
ⅢＢ４ｅ２（第３図、図版３－５・６）

暗褐色土、黒色土を経てローム漸移層に至る。南東隅に径80cm、深さ88cmの大きな柱穴状の掘り込みが認められる。覆土全体にロームブロックを充填しているほか、20cm～30cmの礫が５個重ねるように埋められていた。周辺の土層を観察してもローム漸移層が堆積しており、住居址に伴うものではない。また、この柱穴の付近まで、ⅢＢ４ｅ４で検出された１号住居址がきていることが南壁の観察から予想され、この柱穴の方が新しいことが確認できる。この他にも、深さ20cm～27cmの柱穴状の遺構が確認されている。

ⅢＢ４ｅ４（第３図、図版３－７）

表土層を取り除くと、薄い黒色土を挟んで再び暗褐色土となる。この層中には炭化物粒子を含むほか、小さいながら縄文土器片が多数出土し始めた。このことから、この調査区が住居址の覆土を掘り下げていると確信する。

床面まで掘り下げると、調査区の北東隅に径が30cmほどで、深さが10cmほどの小さな穴がいくつか検出さ




第3図　検出された遺構と土層堆積状態(2)（1/60）

れ、その周辺に焼土ブロックが認められたことから、石囲炉の礫が抜き取られた痕跡と考えられた。この炉を住居址の中心と考えると、ⅢＣ４ｂ３で住居址の北東端の壁が確認されているものが同じ住居址になることが理解される。

本調査区内には、この炉址以外にも柱穴状の遺構がいくつか検出されている。中でも南壁際中央で検出された柱穴は、深さが50cmほどあり、住居址の主柱穴としてもよいものである。他の遺構は深さが14cm～20cmと浅く、炉に近いものもあることから、主柱穴とはなり得ない。

遺物は、中期前半の縄文土器に混じって、南壁際では石皿が出土している。

ⅢＢ５ｅ１（第３図、図版３－８）

20cmほどの表土層を取り除くと、10cmほどの黒色土を挟みローム漸移層となる。南側で径50cm～60cm、深さ10cm未満の浅い遺構が２基検出されている。どちらの遺構も周辺にローム漸移層が堆積していることから、住居址などの大きな遺構に伴うものとは考えられない。

ⅢＢ５ｅ３（第４図、図版４－１・２）

北壁の土層堆積の様子を見ても、東壁際の一部を残し住居址のような大きな遺構の一部になることは明らかであるが、南側のⅢＢ５ｅ５、あるいはⅢＢ５ｃ４の掘り下げやその調査区における壁面の観察から本遺構に関連すると考えられる何らかの痕跡も見いだすことができなかった。あるいは前述したように、ⅢＢ５ｃ４で検出された住居址の外側のローム漸移層まで含めた、範囲が広く不整形な遺構となる可能性もある。

遺構内で検出された柱穴はどれも立派なもので、重複しているものも見られた。

ⅢＢ５ｅ５（第４図、図版４－３・４）

20cmほどの表土層と、その下の10cmほどの黒色土を取り除くと、西側に大きく掘り込まれた住居址が検出される。床面までの深さは、確認面から60cmを測る箇所もある。調査区の西壁際で検出された柱穴は54cmと深く、主柱穴となるのであろう。壁際の遺構は深さが25cmほどで、主柱穴とはなり得ないであろう。

この住居址の外側、調査区の東側には、３基の遺構が検出された。北側の遺構が深さ８cm、中央の遺構が深さ25cm、南東隅の遺構が深さ21cmである。

ⅢＢ６ｅ２（第４図、図版４－５）

表土層を取り除くと、締まった暗褐色土となり、その下が直ちに平坦なローム層となる。特に住居址の床面のような硬さはないが、全体にローム漸移層の堆積がなく、住居址内の可能性もあるが、周辺の調査区にその痕跡がないため、今回は未確認としておく。

遺物は中央の柱穴内から土器片が１点出土した他は、礫が数点出土したのみである。

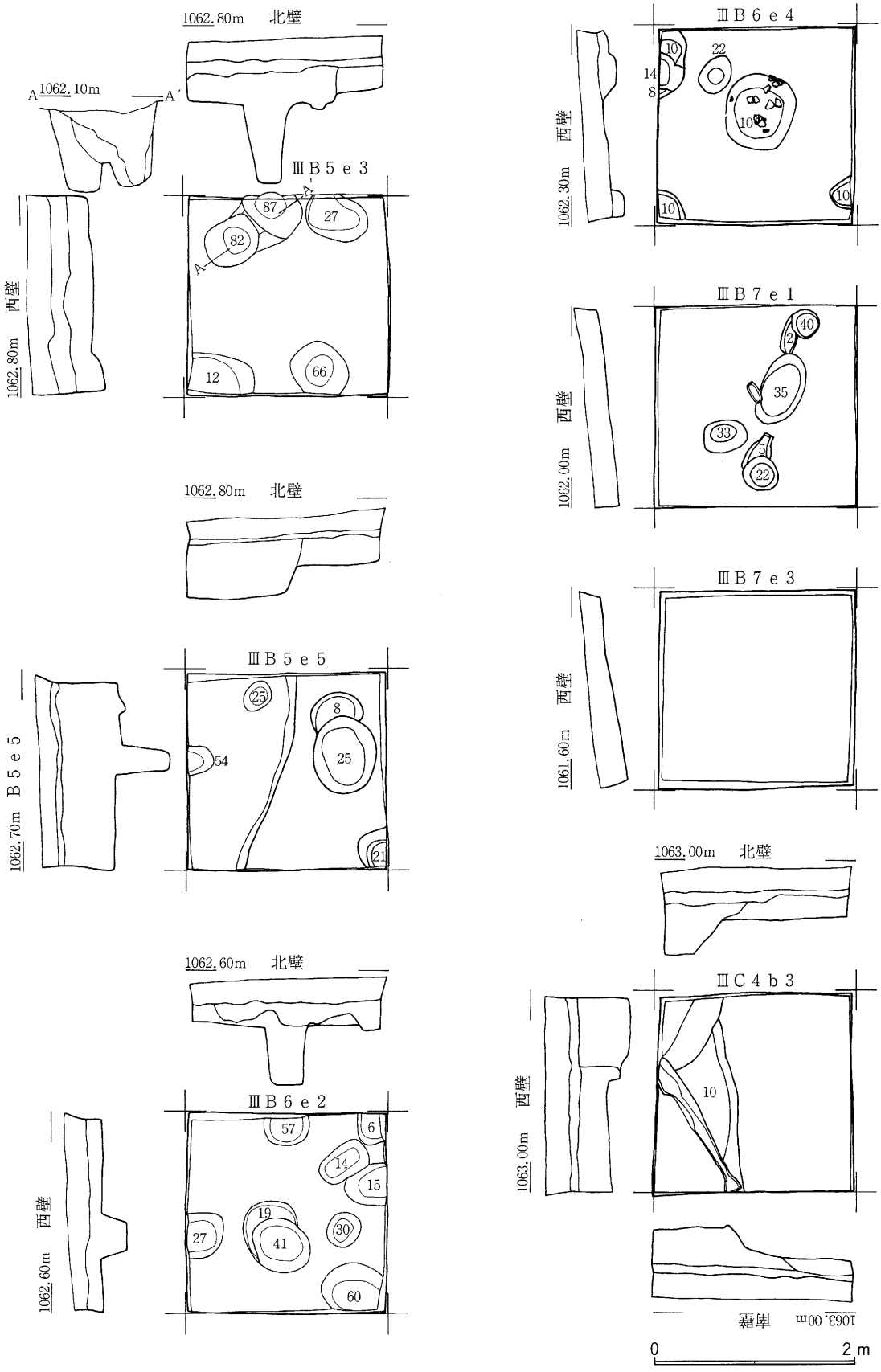
ⅢＢ６ｅ４（第４図、図版４－６・７）

20cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。ローム漸移層の堆積がないことから、耕作によって、上層が削平されているのであろう。深さ10cmほどの浅い土坑がいくつか検出されたが、そのうち、中央の径75cmほどの土坑には、縄文土器片が埋設されていた。

ⅢＢ７ｅ１（第４図、図版４－８）

20cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。表土層もロームブロックの多く含まれる土層で、遺物包含層も耕作により削平され、なくなってしまったと考えられる。

遺構は、深さが22cmから40cmあり、しっかりしている。各遺構を結ぶ深さ２cmから５cmの溝があるが、住居址の周溝となるような遺構は、周辺の調査区で検出されていない。




第４図　検出された遺構と土層堆積状態(3)（1/60）

ⅢＢ７ｅ３（第４図）

20cmから25cmの表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。遺構の検出や遺物の出土もなかった。

ⅢＣ４ｂ３（第４図、図版５－１・２）

25cmほどの表土層を取り除くと、黒色土となる。これを取り除くと、暗褐色のローム漸移層となるが、調査区の西側に掘り込みを確認できる。当初、一つの遺構と考えていたが、掘り下げを開始すると北西に広がる遺構と南西に広がる遺構に分かれることが確認できた。さらに、深さが10cmほどの一段浅い掘り込みも確認されている。

北西に広がる遺構は、深さは確認面から50cmほどあるしっかりしたものであるが、北西で調査したⅢＢ４ｅ２にまではその痕跡が至っていないと考えられることから、住居址のような大きさにはならないのではないかと考えられる。

南西に広がる遺構は、周溝を伴っており、ⅢＢ４ｅ４の北東で検出された炉址を中心とする住居址の北東端になるものと考えられる。この２基の遺構は切り合っているが、覆土はどちらも同じ暗褐色土で、判別が難しい。南側の住居址の方が新しいように見受けられたが、北側の遺構の未掘部分の調査によっては、その出土品から新旧関係を逆転しなければならなくなる可能性もある。南側の住居址の時期は、ⅢＢ４ｅ４で出土した縄文土器から、縄文時代中期中葉であろう。

これらの遺構と重複し、一段高いところに底面のある掘り込みは、他の遺構と覆土がほとんど同じで、新旧関係は明らかでない。

ⅢＣ５ｂ２（第５図、図版５－３）

20cmほどの表土層と、10cm以上ある黒色土を取り除くと、ローム漸移層になる。この時点でいくつかの掘り込みが確認できたが、平面形をはっきりさせるため、ローム面まで掘り下げを行った。

調査区内からは、重複も含め５基の柱穴状の遺構が検出されている。ローム面からの深さは13cmから46cmであるが、そこまでに至るローム漸移層が30cmほどと厚いので、掘り込み面から底面までを考えると、しっかりした柱穴となることがわかる。この調査区全面にローム漸移層が堆積していることから、これらの遺構は住居址に伴うものとは考えられない。

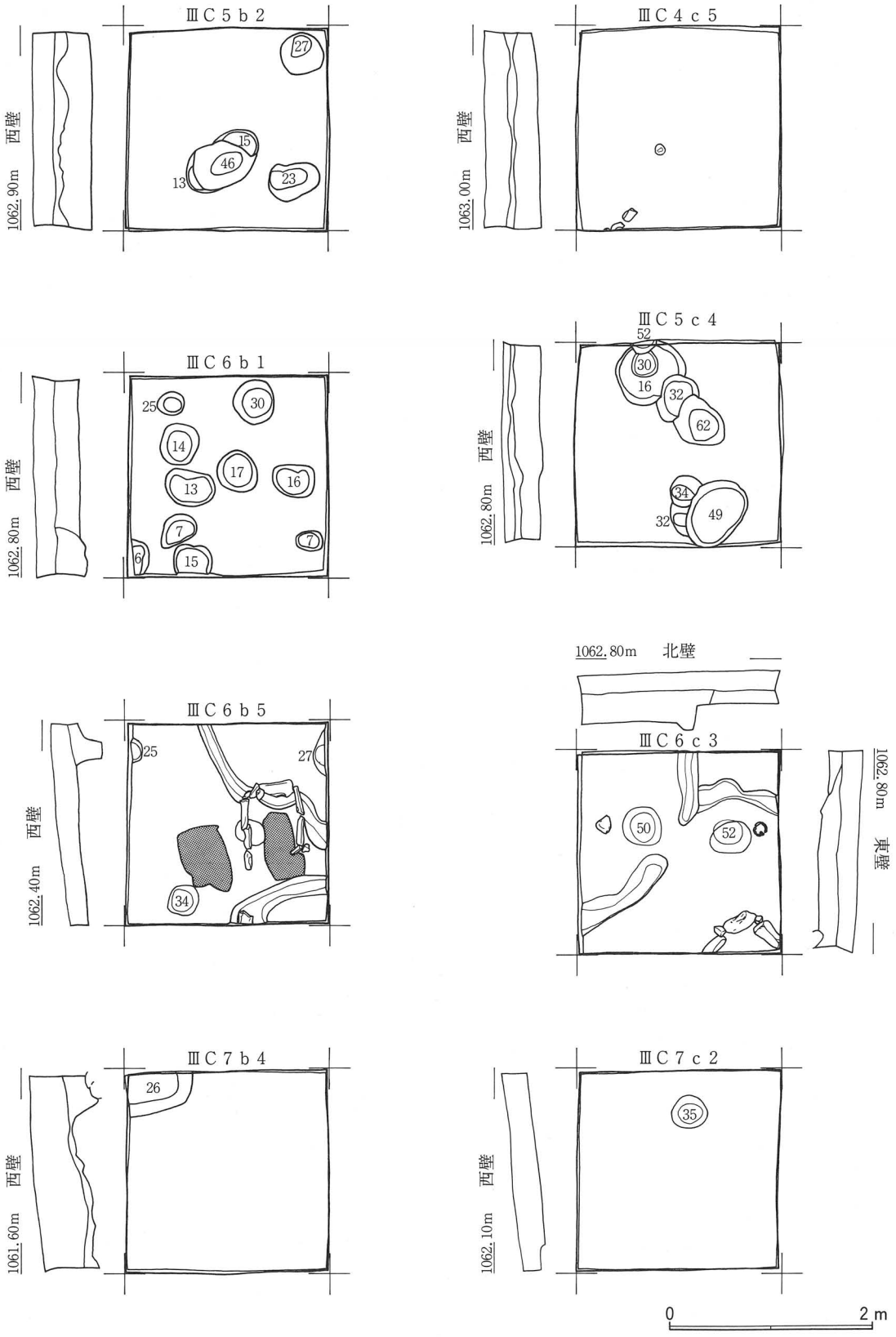
ⅢＣ６ｂ１（第５図、図版５－４）

20cmほどの表土層を掘り下げると、直ちにローム漸移層となる。その面で暗褐色土を覆土に持ついくつもの掘り込みが確認できたが、遺構の数や平面形を確認するため、さらにローム面まで掘り下げを行った。そのため、それぞれの遺構の深さは７cmから30cmと浅いものの、実際にはそれに20cmほど上乗せした深さとなり、どれもしっかりとした柱穴となる。しかしどの柱穴も住居址などの大きな遺構に伴うものとは考えにくい。

ⅢＣ６ｂ５（第５図、図版５－５・６）

表土層を20cmほど掘り下げると、直ちに住居の床面が現れる。既に耕作によって削平されているようで、調査区の北側と南側では10cmほどの比高差が認められるが、そこに石囲炉と地床炉が検出された。また、方向の異なる２本の周溝も検出されたことにより、少なくとも３基の住居址の存在が確認できる。

北東で確認された周溝は、後述するⅢＣ６ｃ３で石囲炉が検出された住居址（６号住居址）に伴うものと考えられる。本調査区には石囲炉と地床炉の２つの炉が検出されているが、同一床面にあることから、これを１基の住居址（７号住居址）とした。また、ここで検出された石囲炉は南東に広がる別の住居址（８号住居址）に切られている。




第5図　検出された遺構と土層堆積状態(4)（1/60）

柱穴と考えられる遺構は２基あるが、６号住居址、８号住居址の範囲からはずれているため、いずれも７号住居址に伴うのではないかと考えられる。

ⅢＣ７ｂ４（第５図）

30cm～40cmの表土層を取り除くと、薄い黒色土を挟んで灰褐色土の火砕流の堆積土となる。火砕流の層は凹凸が激しいが、それを掘り込んだ遺構が北西隅にある。遺構は、深さ20cmほどの隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると考えられる。覆土は黒色土である。遺構は火砕流に含まれる礫層を底面としており凹凸が激しい。しかし火砕流自体が非常に硬い層であり、自然の掘り込みとは考えにくい。

本調査区からは、遺物の出土はなかった。

ⅢＣ４ｃ５（第５図、図版５－７）

表土層を20cmほど掘り下げると薄い黒色土層となるが、その下は暗褐色のローム漸移層である。遺物は縄文土器や礫がわずかに出土するだけである。全面にローム漸移層が堆積していることから、これを掘り込むような住居址などの遺構からは、はずれていると思われる。

ⅢＣ５ｃ４（第５図、図版５－８）

10cmほどの浅い表土層を取り除くと、黒色土層となるが、その下は暗褐色のローム漸移層である。いくつかの遺構のあることは分かったが、それぞれの平面形をはっきりさせるため、ローム面まで掘り下げを行った。すべて柱穴状の遺構で、深さは60cmを超えるものまであるが、調査区の全面にローム漸移層が堆積していることから、住居址などの遺構に伴うものとは考えられない。

ⅢＣ６ｃ３（第５図、図版６－１・２）

20cmほどの表土層を取り除くと、北東隅にローム漸移層が堆積する他は炭化物粒子の混じる暗褐色土層が堆積していた。住居址の覆土になることを予想し掘り下げを行ったところ、調査区の南東隅で石囲炉が検出された。また、北西に広がる別の住居址の周溝も検出できた。

石囲炉を伴う６号住居址は、ⅢＣ６ｂ５で検出した周溝にまで範囲が広がると考えられ、径６ｍの住居址と推測される。

北西に広がる５号住居址は、隣接する他の調査区に痕跡が認められず、規模は不明である。

ⅢＣ７ｃ２（第５図、図版６－３）

20cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム面となる。ⅢＣ６ｂ５で検出した周溝を伴う８号住居址の範囲内と考えられるが、耕作による削平により床面や壁は既に消失している。検出した柱穴はその８号住居址に伴うと考えられる。

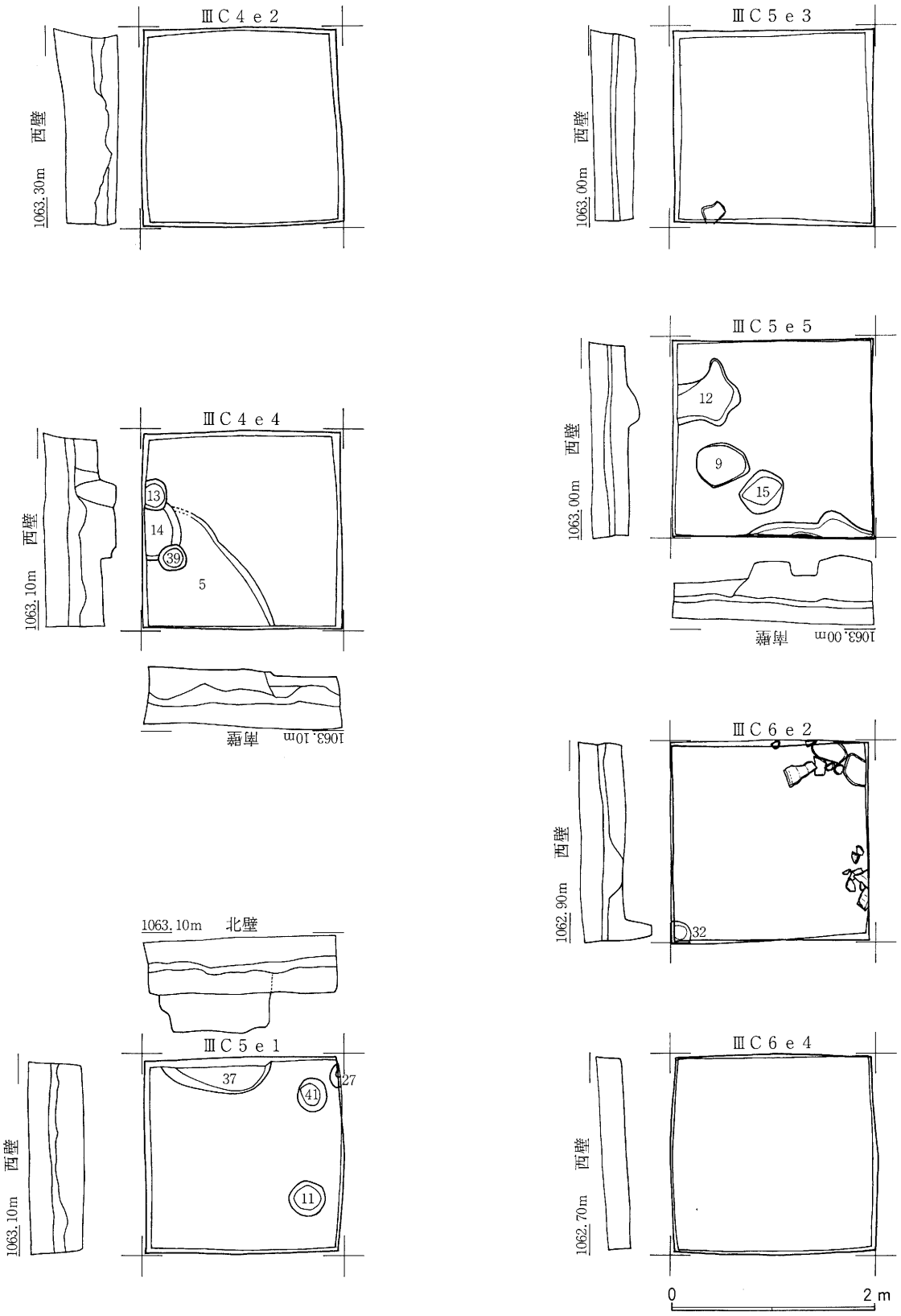
ⅢＣ４ｅ２（第６図）

30cm以上ある表土層を取り除くと、部分的に黒色土層を挟みローム漸移層となる。耕作によって荒れているが、調査区全体にローム漸移層が堆積していることから、住居址などの遺構はないものと考えられる。

ⅢＣ４ｅ４（第６図、図版６－４）

表土層とその下層にある黒色土を取り除くと、調査区の南西隅に暗褐色土の掘り込みが確認された。掘り込みの深さは５cmほどと浅く、底面も住居址のような硬さを持ったものではない。この範囲にはローム漸移層の堆積がないので、何らかの遺構になると考えられるが、ⅢＣ４ｃ５やⅢＣ５ｅ１にまではこの痕跡が至っていないので、住居址よりは小さな遺構になるのであろう。

他に、西壁際に浅い掘り込みが確認されている。




第６図　検出された遺構と土層堆積状態(5)（1/60）

ⅢＣ５ｅ１（第６図、図版６－５）

表土層と黒色土を掘り下げるとローム漸移層となる。北壁際にローム漸移層面から55cmほどの深さになる掘り込みが検出されている。覆土は上下２層に分層できるが、上層はローム漸移層とほとんど区別できない。下層は２cm前後のロームブロックを含む。また、微細な炭化物粒子を希に含んでいる。壁面及び底面はしっかりしているが、北側のⅢＣ４ｅ４にまでは至っていないので、住居址のような大きな遺構にはならないと考えられる。また、覆土の様子から墓坑という感じでもない。

このやや大きな遺構の他、東壁際に３基の小さな遺構が存在する。北側の２基の遺構は深さが27cmと41cmあり、壁面もしっかりしたものであるが、南側の１基は深さが11cmと浅い。いずれも周辺にローム漸移層が堆積していることから、住居址の柱穴になるようなものではないと考えられる。

ⅢＣ５ｅ３（第６図）

表土層とその下層にある黒色土を取り除くと、全面にローム漸移層が現れる。遺構は何も検出されなかった。

ⅢＣ５ｅ５（第６図、図版６－６）

表土層とその下層にある黒色土を取り除くと、ローム漸移層となるが、西側と南側で、掘り込みが確認された。西側の２基の小さな掘り込みは、平面形が不整形で、深さも９～12cmと浅い。南側の小さな掘り込みは、深さが15cmで他に比べるとやや深いが、いずれからも遺物の出土はない。

南壁際の掘り込みは、ⅢＣ６ｅ２で石囲炉が検出された４号住居址の北端にあたると考えられ、周溝も確認できた。覆土からは、縄文土器片が２点出土している。

ⅢＣ６ｅ２（第６図、図版６－７・８）

表土層とその下層にある黒色土を取り除くと、炭化物粒子を含む暗褐色土となるが、縄文土器片が出土し始める。覆土は20cm足らずで、硬い床面となる。また、調査区の北東隅では、平坦な自然礫を用いた石囲炉の一部が現れる。さらに、南西隅には床面からの深さが30cmほどの小さな柱穴が検出された。

前述のⅢＣ５ｅ５でこの住居（４号住居址）の北端が検出されているが、南端を確認できていないので住居址の規模は明らかでないが、ⅢＣ６ｅ４にまではこの住居址の痕跡は至っていない。

遺物の量は礫を含めて60点ほどと少ないが、石囲炉近くと東壁南側で同一個体になるＸ字状把手を持つ深鉢の大きな破片が出土した。

ⅢＣ６ｅ４（第６図）

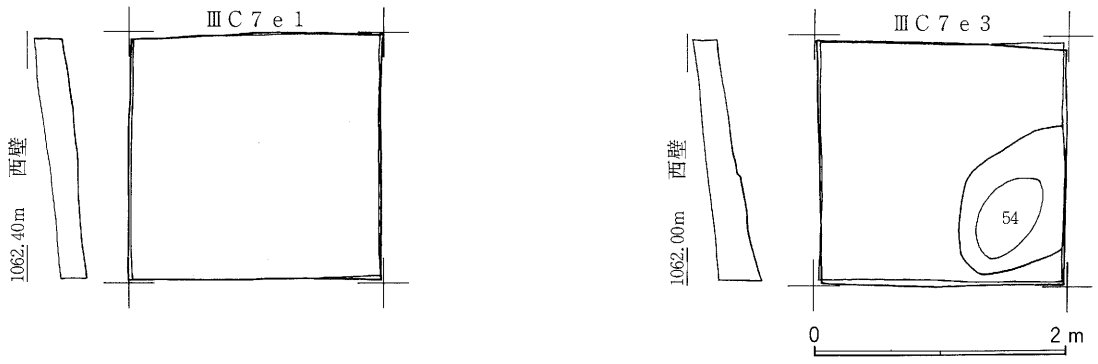
25cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。表土層中にもロームブロックの混入が多く、耕作がローム面にまで至っていたことが理解される。遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅢＣ７ｅ１（第７図）

25cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。表土層中にもロームブロックの混入が多く、耕作がローム面にまで至っていたことが理解される。遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅢＣ７ｅ３（第７図）

20～35cmの表土層を取り除くと、ローム層と火砕流が混じった灰褐色土となる。調査区の南東隅に卵形をした掘り込みが見られるが、人為的なものかは不明である。遺構の北端と底面との比高差は55cmほどある。底面には径20cmほどの角礫の層が顔を出しており、凹凸が激しい。




第７図　検出された遺構と土層堆積状態(6)（１/60）

## 尖石地区北側

ⅡＨ９ａ１（第８図、図版７－１～３）

表土層を取り除くと、大型の縄文土器の破片や礫が多く出土し始める。当初住居址になるのではないかと考えたが、さらに掘り下げていくと、径１ｍほどの土坑やそれより小さな柱穴が多数検出された。

平成５年度に、この調査区に隣接するⅡＧ８ｅ５とⅡＧ９ｅ２を調査し、やはり多くの土坑を検出しているが、やはり住居址としては確認されていない。土坑群の密集したものと考えてよいのではなかろうか。

ⅡＨ９ａ３（第８図、図版７－４）

表土層を取り除くと、ローム漸移層となる。深さ８cmから30cmの柱穴状の遺構がいくつか検出されているが、住居址に伴うとは考えられない。

ⅡＨ９ａ５（第８図、図版７－５）

表土層を取り除くと、ローム漸移層となる。深さ10cmから53cmの柱穴状の遺構がいくつか検出されている。また、径約１ｍで深さ６cmの浅い土坑状の掘り込みもあったが、どちらも住居址に伴うとは考えられない。調査区の北西から南東に向かい、灌水パイプが埋設されている。

ⅡＨ10ｃ２（第８図、図版７－６）

表土層を取り除くと、ローム漸移層となる。南西隅に灌水パイプが埋設されているが、それより下層で柱穴状の掘り込みがいくつか検出された。遺構の深さはローム面からは６cmから28cmであるが、掘り込み面であるローム漸移層からは26cmから48cmとしっかりしたものである。しかし、住居址などの遺構に伴うとは考えられない。

ⅡＨ９ｄ１（第８図、図版７－７～８－３）

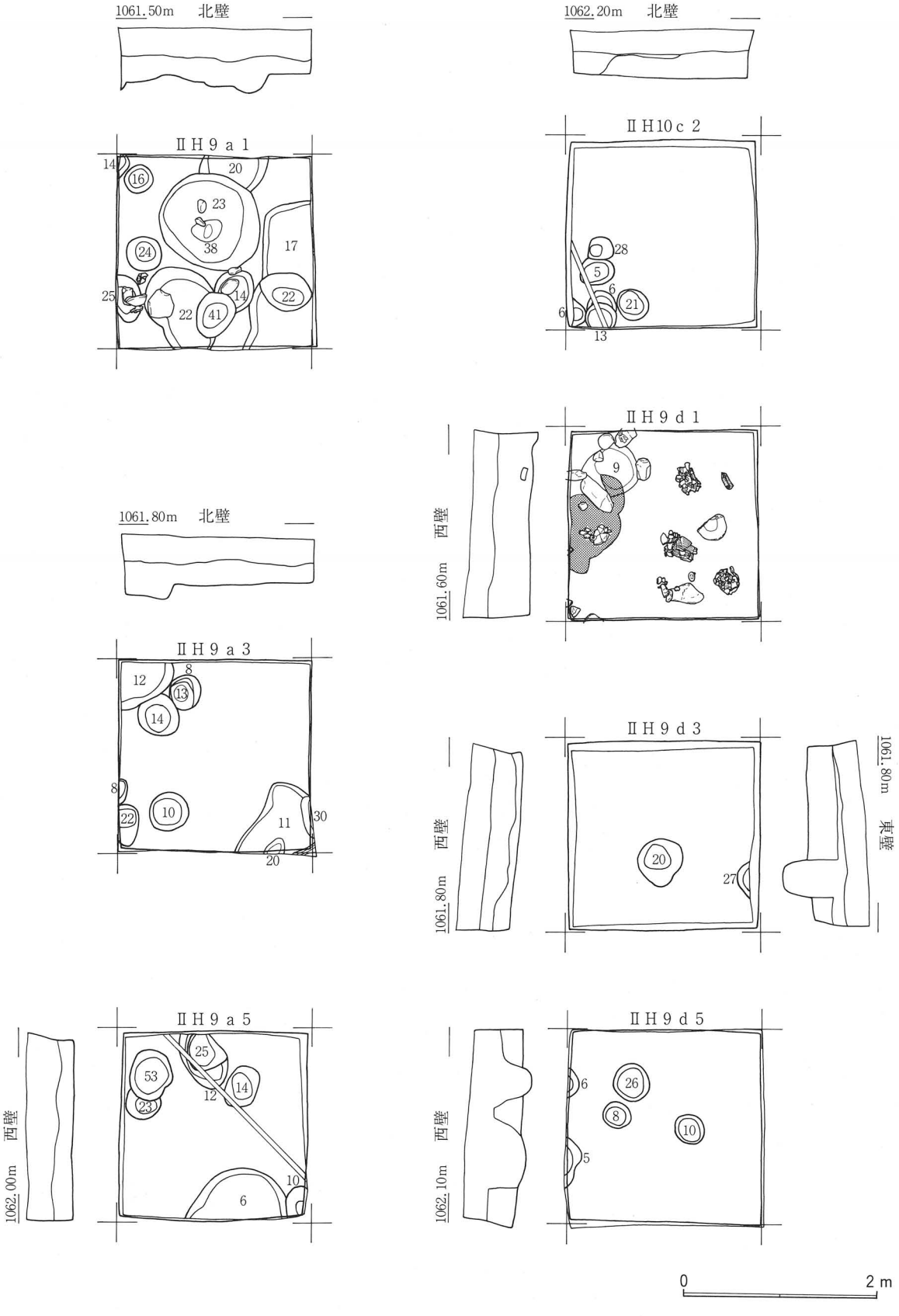
表土層を取り除くと、やや黒味の強い暗褐色土となり、縄文土器片などの遺物が出土し始める。遺物の点数は少ないものの、復元により完形となる縄文土器もいくつかある他、石皿の欠損品も出土する。

西壁際には部分的に炉石が残り、焼土もあることから、住居址になると考えられる（９号住居址）。炉は北西のやや窪んだところに位置するが、焼土はそれよりも南に多く見受けられる。

遺物は縄文時代中期の井戸尻Ⅲ期から曽利Ⅰ期にかけてのものが混在するが、住居址の重複は考えられない。

ⅡＨ９ｄ３（第８図、図版８－４）

表土層を取り除くと、ローム漸移層となる。遺構の掘り下げは、ローム面まで掘り下げてから行ったため、遺構の深さは20cmから27cmと浅いが、土層断面で確認できる遺構の深さは50cmから55cmとかなりしっかりし




第８図　検出された遺構と土層堆積状態(7)（1/60）

たものである。これら２基の遺構は、住居址に伴うものとは考えられない。

ⅡＨ９ｄ５（第８図、図版８－５）

表土層を取り除くと、ローム漸移層となる。その面でいくつかの遺構を検出した。遺構の掘り下げは、ローム面まで掘り下げた後に行ったが、覆土は表土層とほとんど区別の付かない暗褐色土である。いずれも、ローム漸移層上面からの深さは40cmから55cmほどとなり、しっかりしたものであるが、住居址などの遺構に伴うものではない。中期中葉の縄文土器下半（第17図10）が出土している。

ⅡＩ９ｂ１（第９図）

表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。この調査区から東は、今回の調査区内にある湧水のためできた谷に向かって傾斜し始めるが、ここはちょうどその谷に向かう地形変換点付近にあたる。

遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＩ９ｂ４（第９図、図版８－６・７）

表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。南壁際で縄文土器片が数点まとまって出土した他は、遺物の出土はない。その遺物がまとまって出土した箇所を精査すると、南壁の土層断面に遺構の掘り込みのあったことが確認された。覆土は暗褐色土で、ローム粒子の混入が多い。

ⅡＩ10ｃ３（第９図）

表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＩ10ｄ１（第９図）

表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＪ９ａ５（第９図）

表土層を取り除くと、黒褐色土層、ローム漸移層と続く。遺物は黒褐色土層内から縄文土器片が200点余りと多量に出土したが、復元により完形となるような一括土器の出土はなかった。西側の平坦面からの、投げ込みもしくは流れ込みによるものではないかと考えられる。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなるが、後述する調査区のように水がたまるほどではない。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出はなかった。

ⅡＪ９ｃ３（第９図）

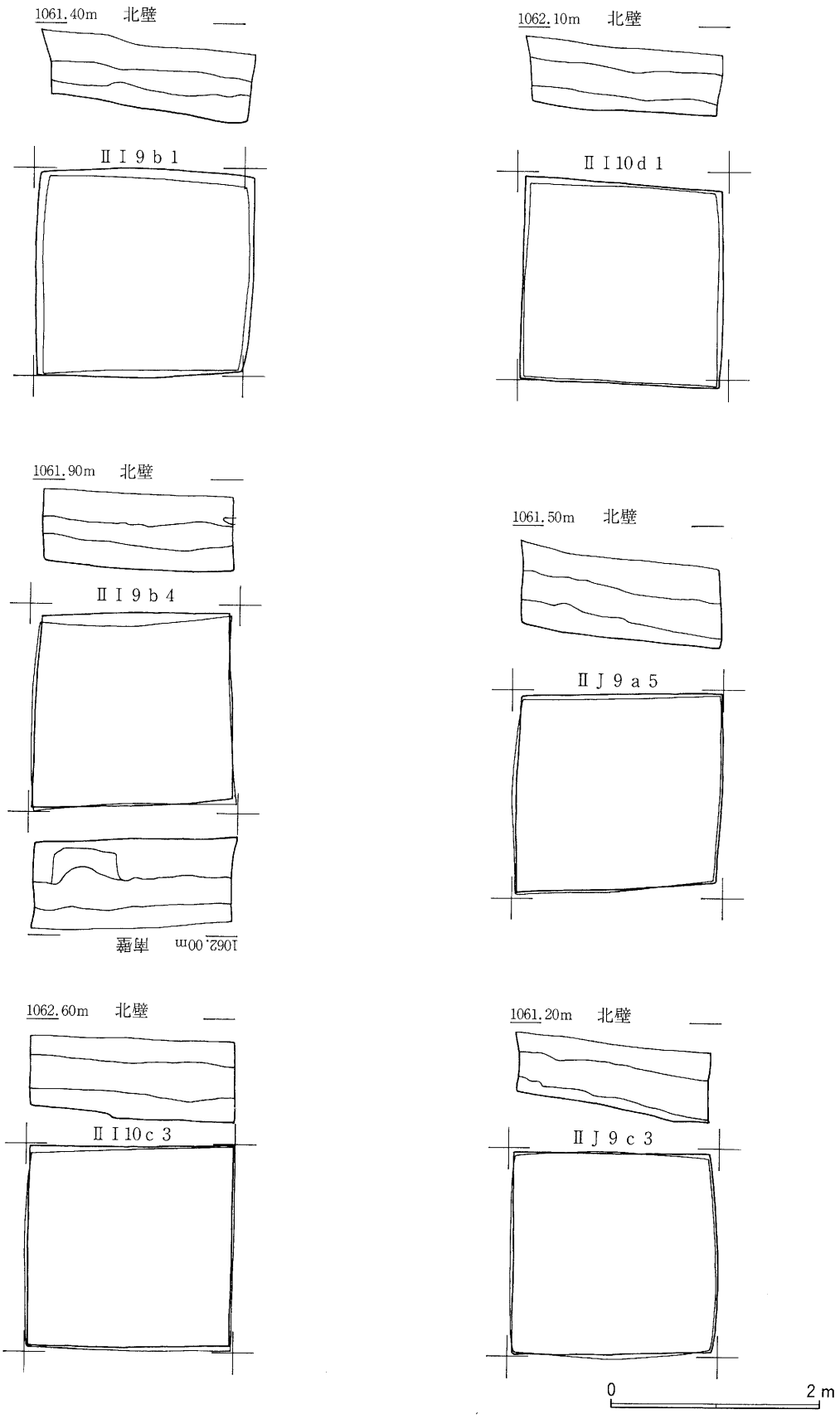
表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、縄文土器片が黒褐色土層中から50点ほど出土しただけで、遺構の検出はなかった。

ⅡＪ11ｂ１・ｃ１・ｄ１・ｅ１（第10図）

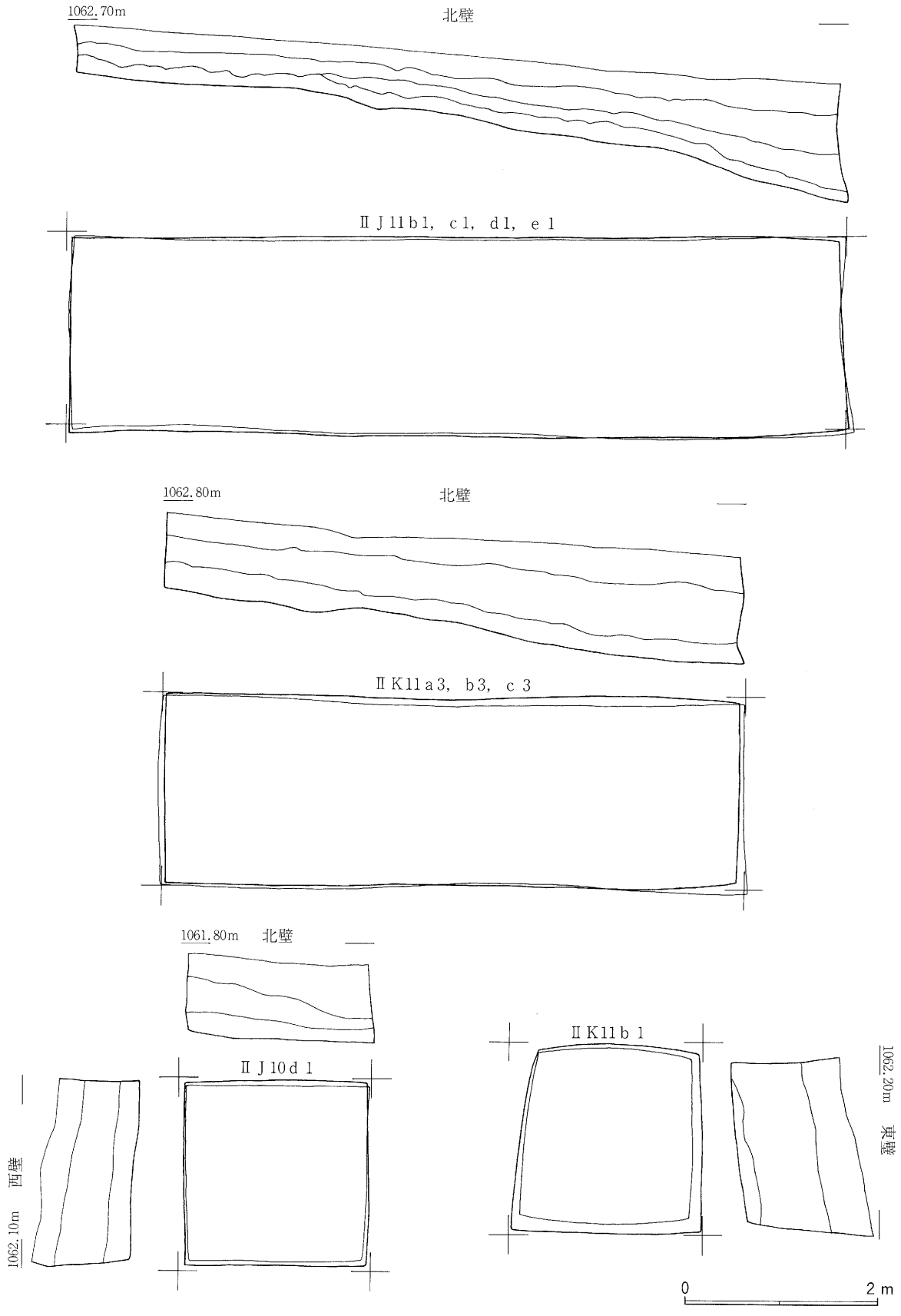
表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。暗褐色土層は、深くなるにつれて、ローム粒子の多い、やや明るい暗褐色土層が下層に現れ分層される。Ｊ11ｅ１の北東隅は、ローム面近くまで掘り下げると、水が湧き出してくる。ローム面まで掘り下げたが、ⅡＪ11ｅ１で縄文土器片が50点ほど出土しただけで、遺構の検出はなかった。

ⅡＫ11ａ３・ｂ３・ｃ３（第10図）

表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。遺物は、ⅡＫ11ｃ３の暗褐色土層中より縄文土器片が20点余り出土しただけで、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出なかった。




第9図　検出された遺構と土層堆積状態(8)（1/60）




第10図　検出された遺構と土層堆積状態(9)（1/60）

ⅡＪ10ｄ１（第10図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。黒褐色土層の上層から、縄文土器片が150点近く出土したが、復元により完形となるような一括土器の出土はなかった。また、ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出はなかった。

ⅡＫ11ｂ１（第10図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＫ10ｃ３（第11図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＫ10ｅ３（第11図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＫ11ｅ１（第11図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＬ11ａ３（第11図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、縄文土器片が30点近く出土した他は、遺構の検出はなかった。

ⅡＬ10ｂ３（第11図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層の後、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＬ11ｂ１（第11図）

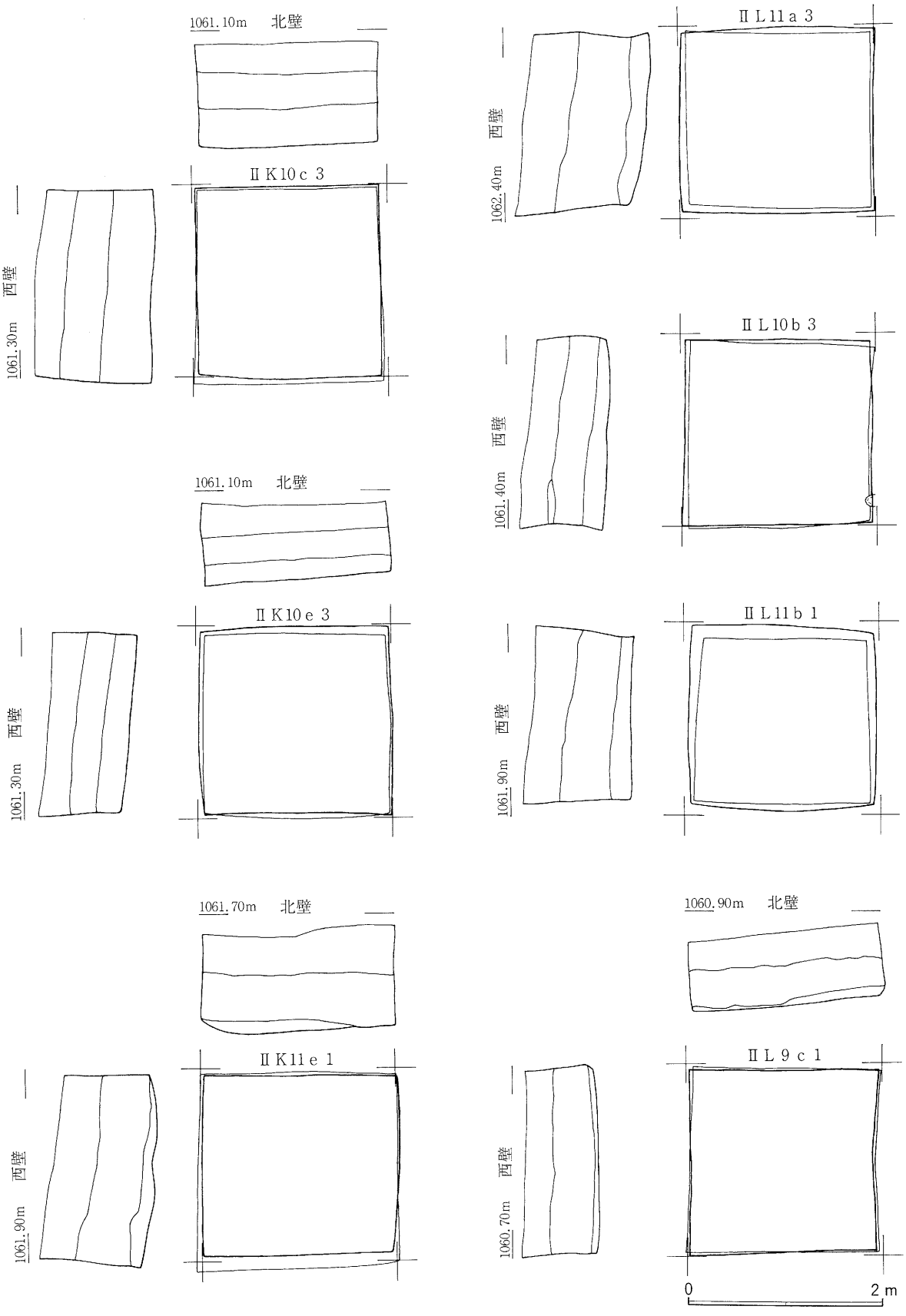
表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＬ９ｃ１（第11図）

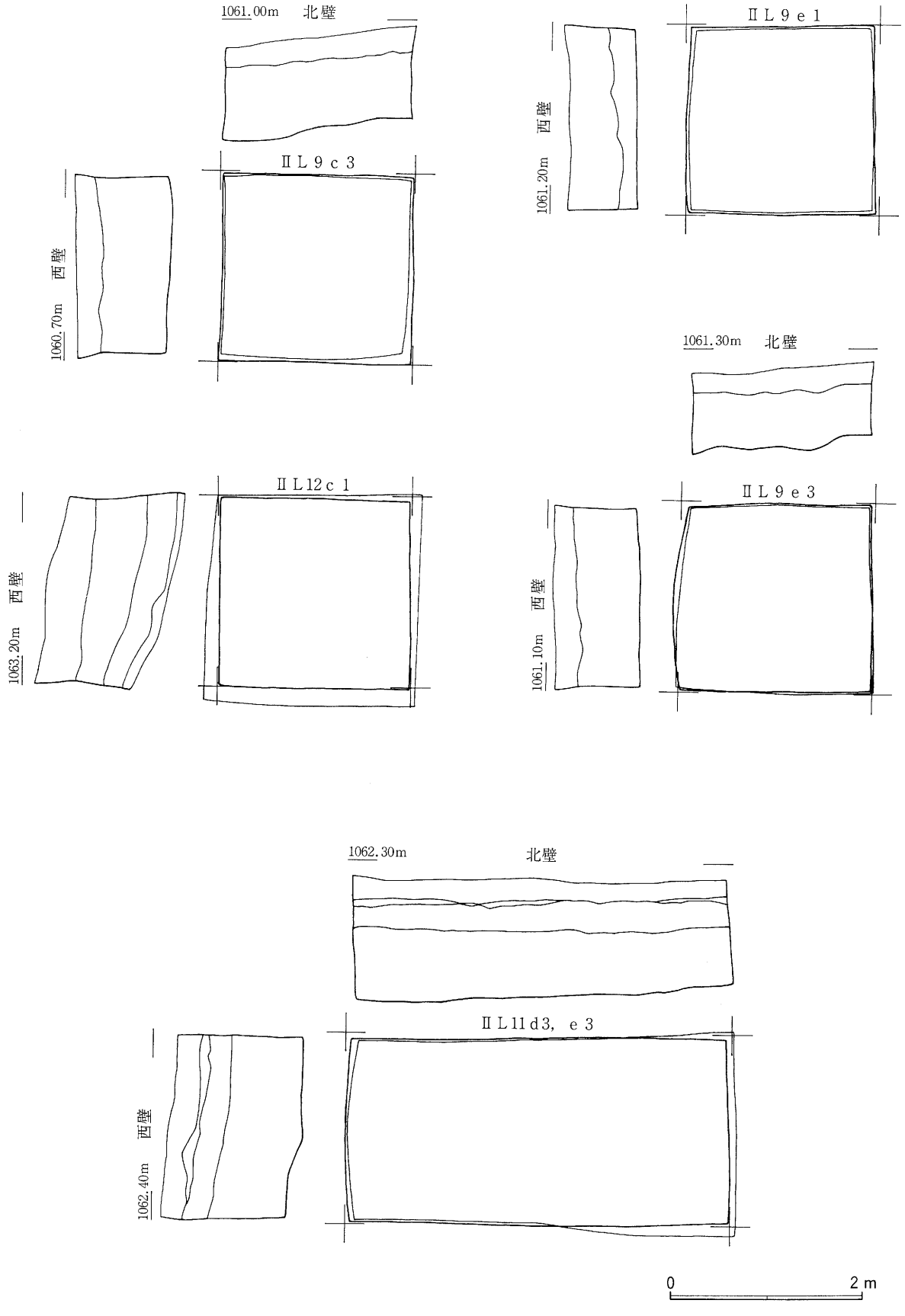
表土層を取り除くと、暗褐色土、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡＬ９ｃ３（第12図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げ




第11図　検出された遺構と土層堆積状態(10)（1/60）




第12図　検出された遺構と土層堆積状態(1)（1/60）

ると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

IIL12c 1（第12図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、黒褐色土層内から縄文土器片が60点近く出土した他は、遺構の検出はなかった。

IIL 9 e 1（第12図）

表土層を取り除くと、暗褐色土、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、暗褐色土層内から縄文土器片が20点ほど出土しただけで、遺構の検出はなかった。

IIL 9 e 3（第12図）

表土層を取り除くと、暗褐色土、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、暗褐色土層内から縄文土器片が10点ほど出土しただけで、遺構の検出はなかった。

IIL11d 3・e 3（第12図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層の後、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、黒褐色土層内から縄文土器片が130点余り出土した他は、遺構の検出はなかった。

IIL10e 5（第13図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

IIL12e 1（第13図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層の後、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、黒褐色土層内から縄文土器片が20点余り出土した他は、遺構の検出はなかった。

IIM12a 3（第13図）

表土層を取り除くと、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

IIM 9 b 1（第13図）

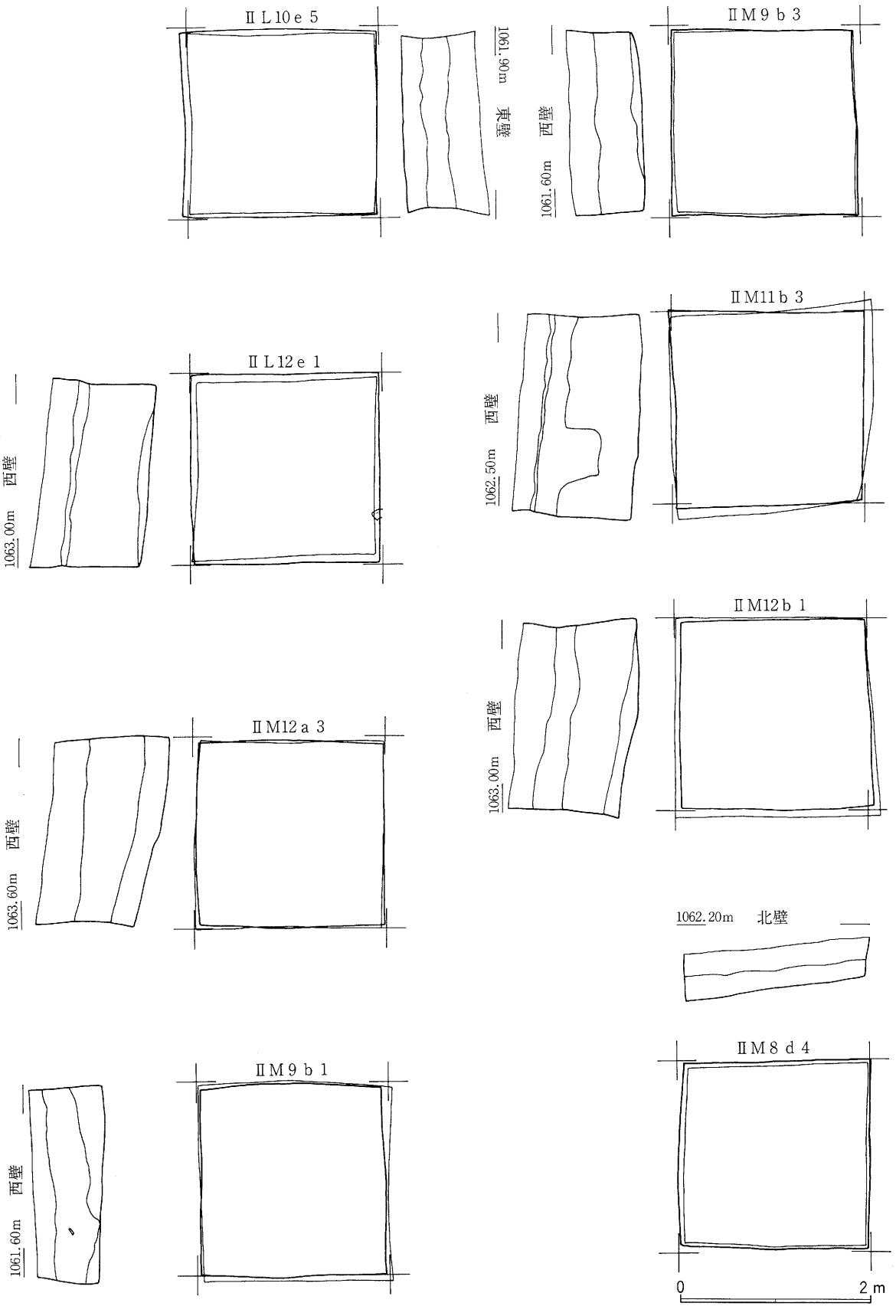
表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

IIM 9 b 3（第13図）

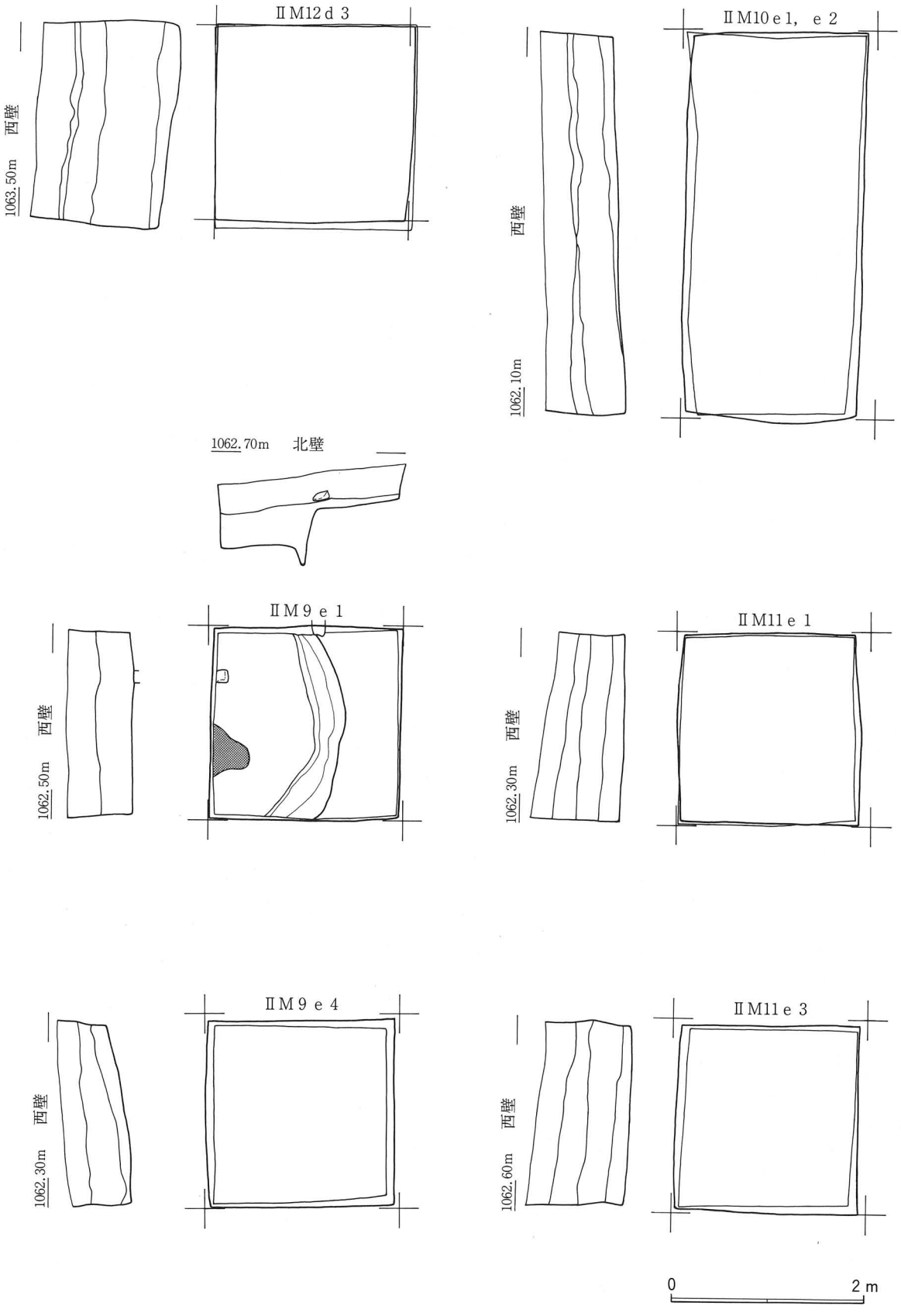
表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

IIM11b 3（第13図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層の後、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、縄文土器片が40点近く出土した他は、遺構の検出はなかった。




第13図　検出された遺構と土層堆積状態(12)（1/60）




第14図　検出された遺構と土層堆積状態(13)（1/60）

ⅡM12ｂ１（第13図）

表土層を取り除くと、黒褐色土層、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、縄文土器片が40点余り出土した他は、遺構の検出はなかった。

ⅡＭ８ｄ４（第13図）

表土層を取り除くと、直ちにローム漸移層となる。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡM12ｄ３（第14図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層の後、黒褐色土層、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土層の途中まで掘り下げると、水が湧き出して掘り下げが難しくなる。ポンプを用いながら水をくみ上げ、ローム面まで掘り下げたが、縄文土器片が140点近く出土した他は、遺構の検出はなかった。

ⅡＭ９ｅ１（第14図、図版８－８）

表土層を取り除くと、ローム漸移層となるが、西側に暗褐色の覆土を持つ掘り込みが確認された。掘り下げていくと、遺物の量は少ないものの、住居址の床面と地床炉が検出された。住居址の壁際には周溝も回っている。近接するⅡＭ８ｄ４、Ｍ９ｂ１では遺構の検出がないことから、径450cmほどの円形の住居址になるものと考えられる。

ⅡＭ９ｅ４（第14図）

表土層を取り除くと、暗褐色土層、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡM10ｅ１・ｅ２（第14図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層、黒褐色土層、ローム漸移層と続く。ⅡM10ｅ２の南側では、水が湧き出す。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡM11ｅ１（第14図）

表土層を取り除くと、黒褐色土層、泥炭層のような黒褐色土層、ローム漸移層と続く。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

ⅡM11ｅ３（第14図）

表土層を取り除くと、薄い暗褐色土層、黒褐色土層、ローム漸移層と続く。黒褐色土の途中まで掘り下げると、水が湧き出す。ローム面まで掘り下げたが、遺構の検出や遺物の出土はなかった。

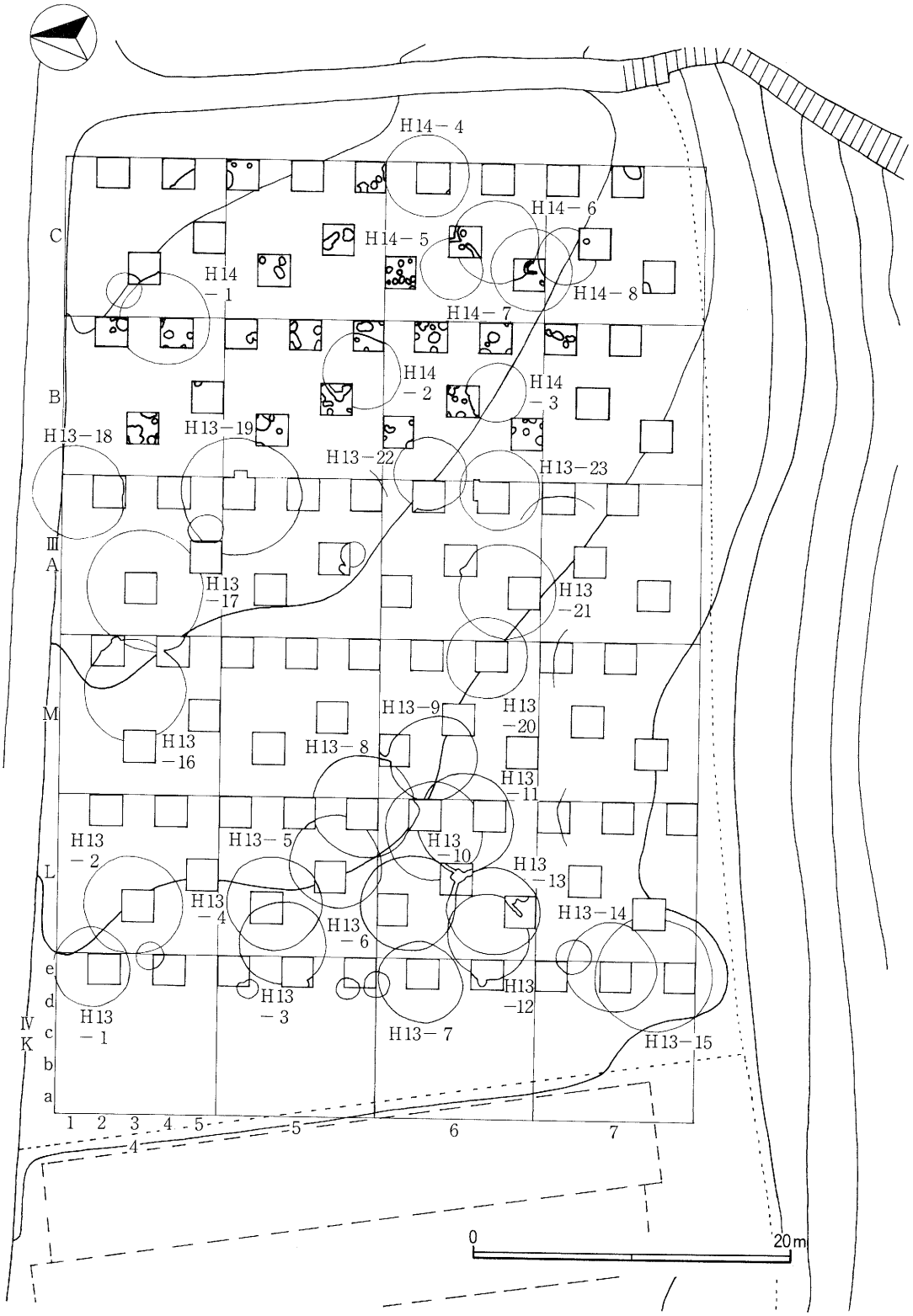
## 第２節　検出された遺構

### 尖石地区南側の住居址

今年度の調査で検出した住居址は、南側で８基、北側で２基の計10基である。

**１号住居址**（第15図中Ｈ14－１）

ⅢＣ４ｂ３で大きな遺構の掘り込みの北東端が検出されていることにより、その西側に住居址の存在が想定された。ⅢＢ４ｅ２ではその北端がわずかに掛かりそうであるが、北端と想定される調査区の南東隅に大きな柱穴状の遺構があり、プランが確認できない。ⅢＢ４ｅ４は住居の南西にあたると考えられる。調査区の北東に、細長く浅いピットがいくつかまとまって検出されている。周辺に焼土ブロックが認められることから、ここから北側に住居の炉址があると考えられる。炉は石囲炉であったと考えられるが、小さなピット




第15図　発掘区と遺構の分布(1)（1/400）

がいくつかあることから、抜き取られているものと考えられる。

本住居址の規模は、遺構の北東端が検出されているだけで明らかでないが、５m前後になるものと考えられる。

遺物は中期中葉の縄文土器片（第17図１～３）の他、石皿（図版９－１）や礫器（図版９－２）も出土した。縄文土器に復元できるような大きな資料はないが、それらの資料から、本住居址の時期は井戸尻Ⅰ・Ⅱ期頃と推察される。

**２号住居址**（第15図中H14－２）

ⅢＢ５ｅ５の西側で深さ55cmとなる大きな掘り込みが検出され、住居址の存在が推測された。ⅢＢ５ｃ４にその住居址の一部と考えられる周溝の一部が検出されたが、その外周もローム面のレベルはほとんど同じであることから、別の住居址の存在も予測される。ⅢＢ５ｅ３の南西隅にも掘り込みがあり本住居址の北東端の可能性も考えられたが、掘り込みは浅く、現時点では別の小さな遺構と考えている。

遺物は、遺構が深い割には破片も小さく時期を決定できる資料は少ないが、把手（図版９－３・４）などの特徴から新道期から藤内期にかけての住居であると考えられる。

**３号住居址**（第15図中H14－３）

ⅢＢ６ｃ３の南側で掘り込みと周溝の一部と考えられる溝が検出されたことにより、住居址とした。南側で調査したⅢＢ６ｂ５、ⅢＢ６ｅ４にこの住居址と考えられる痕跡が認められないことから、径４m前後の小さな住居址になると考えられる。

遺物は、大変出土量が少なく、時期を決定できるものがなかった。礫器が出土している（図版９－５）。

**４号住居址**（第15図中H14－４）

ⅢＣ６ｅ２の北東隅に平らな河原石を用いた石囲炉の一部が検出されたことにより住居址とした。住居址はこの炉を中心とすると考えられるが、ⅢＣ５ｅ５でその北端を検出した。そこには周溝も検出されている。

遺物は、小さな破片が多い中で、炉の近くからＸ字状把手を持つ大きな土器片が出土している（第17図４、図版９－６）。これにより、本住居址の時期は、曽利Ⅱ期を中心としていると考えられる。

**５号住居址**（第15図中H14－５）

ⅢＣ６ｃ３で住居址の南東隅にあたると考えられる周溝が検出されたことにより住居址とした。その外周も床面とほぼ同レベルであるが、これは、本調査区の南東隅で検出された６号住居址と重複するためである。他の調査区で本遺構を確認できていないため、規模は不明である。

調査区内からは、曽利期全般の縄文土器の小片が出土しているが、唯一器形を復元できた縄文土器は本住居址の範囲外に当たり、それが曽利Ⅰ～Ⅱ期のものであることを考えると、本住居址は曽利期でも後半の住居址の可能性が高い。

**６号住居址**（第15図中H14－６）

ⅢＣ６ｃ３の南東隅で石囲炉が検出されたことにより、住居址を確認することができた。前述の５号住居址と重複しているが、調査区の北東隅にローム漸移層が一部残っていることから、住居址の北端を知ることができる。本調査区の南西にあたるⅢＣ６ｂ５の北東側が、本住居址の床面とほぼ同レベルで、柱穴と考えられる遺構もあることから、住居址の範囲はこの辺にまで及んでいると考えられる。しかし、ⅢＣ６ｂ５に７号住居址が存在し、壁が検出できないことから、規模は明らかにできない。

本調査区で唯一器形復元のできた縄文土器（第17図５、図版９－７）が曽利Ⅰ～Ⅱ期であることから、該期の住居址であると考えられる。

**７号住居址**（第15図中Ｈ14－７）

ⅢＣ６ｂ５で石囲炉が検出されたことにより、住居址を確認することができた。炉は南北に長い長方形を呈するが、南側が後述する８号住居址によって切られており、なくなっている。６号住居址との新旧関係については、本住居址の石囲炉が６号住居址の周溝に掛かって構築されていることから、本住居址の方が新しいと考えられる。この石囲炉の西側に地床炉も見受けられるが、同一床面上であることなどから、別の住居址になる可能性は少ないと考えられる。

本住居址は、石囲炉は検出されたものの、表土層を取り除いて直ちに床面となったこともあって、遺物出土も少なく、時期は明らかにできない。前述した６号住居址が曽利Ⅰ～Ⅱ期であり、それよりも新しいことを考えても、本住居址の石囲炉の形態から曽利期のⅡ期くらいまでのものとなろう。

**８号住居址**（第15図中Ｈ14－８）

ⅢＣ６ｂ５で検出された７号住居址の石囲炉が他の住居址によって切られていることは前述したが、その住居址をもって本住居址とした。周溝は認められるが、７号住居址との床面の比高差はあまりない。本住居址の範囲がⅢＣ７ｃ２にまで及んでいそうなことは、そこでの柱穴状の遺構によって推測できるが、既に壁や床面を削平されているため明らかにできない。このため、本住居址の時期を明らかにすることはできないが、曽利期の前半である７号住居址を切って構築されていることから、それよりも新しいことは明らかである。

この他、昨年度調査した住居址Ｈ13－19の東端をⅢＢ５ｂ２で検出している。これにより、昨年度の報告書遺構分布図において推測した住居址の位置を、今回若干変更した。

## 尖石地区北側の住居址

**９号住居址**（第16図中Ｈ14－９）

本遺構は尖石地区の北西端にあたるⅡＨ９ｄ１で検出された。この地区は、平成３年及び平成５年に試掘調査を行った東側にあたる。この地区はそれぞれの年度に行った調査で、多くの縄文時代中期中葉から後半にかけての住居が検出されている箇所である。

掘り下げていくと、表土層中より多くの縄文土器が出土し始め、復元可能な縄文土器も出土したことから、住居址の覆土を掘り下げていたことが理解された。調査区の西壁際中央に石囲炉址があるが、いくつかの礫は抜き取られている。遺物は、一括土器の他、石皿の欠損品（図版９－12）、礫器が出土している。

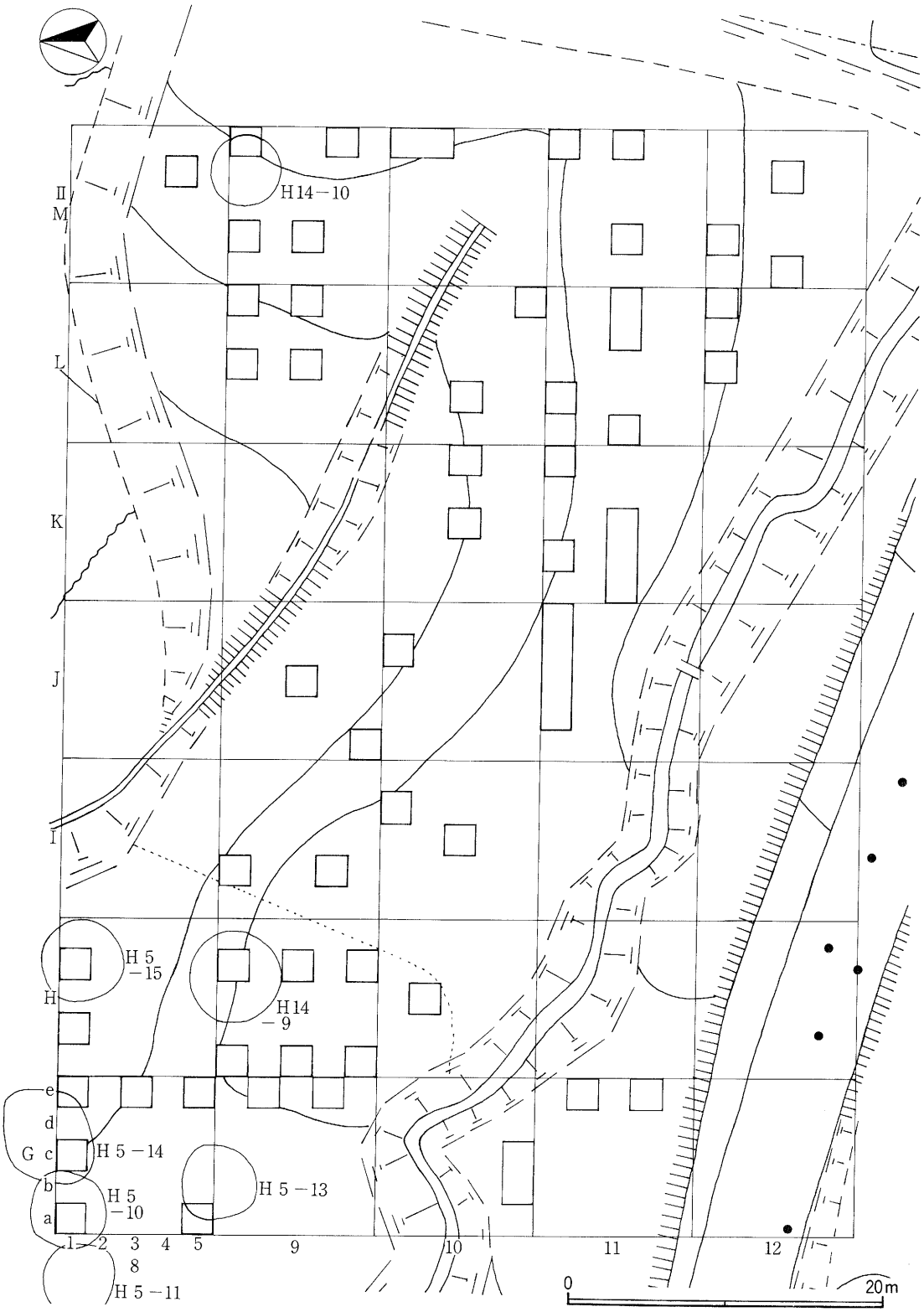
本遺構の時期は、出土した縄文土器から井戸尻Ⅲ期（第17図６～８、図版９－８～10）から曽利Ⅰ期（第17図９、図版９－11）にかけてと考えられる。

**10号住居址**（第16図中Ｈ14－10）

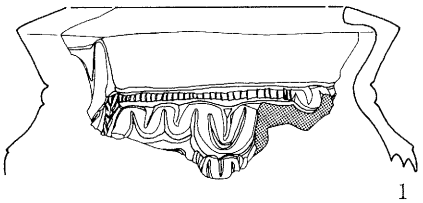
与助尾根南遺跡から続く尾根の、先端に近いⅡＭ９ｅ１で住居址の東端が検出されたことにより命名する。この調査区より西及び南の調査区では、掘り下げにより水が湧き始めるため、この住居址が与助尾根南遺跡における西端の住居址になると考えられる。近接するⅡＭ８ｄ４、Ｍ９ｂ１では遺構の検出がないことから、径450cmほどの円形の住居址になるものと考えられる。

掘り込み面から床面まで40cmほどあり、壁面下には周溝が巡っている。調査区西壁際の床面で地床炉が検出されている。

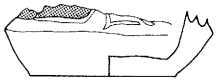
本遺構からは、遺物の出土が少なく、また小片であるため時期を明らかにできない。



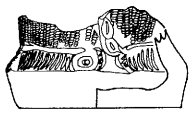

第16図　発掘区と遺構の分布(2)（1/400）



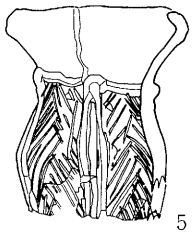
1
ⅢB４e４



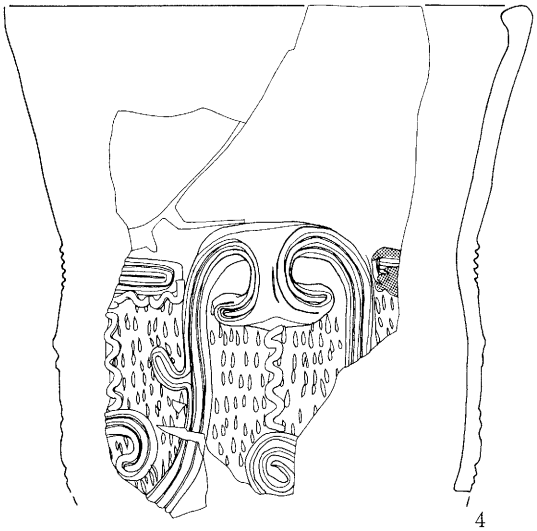
2
ⅢB４e４



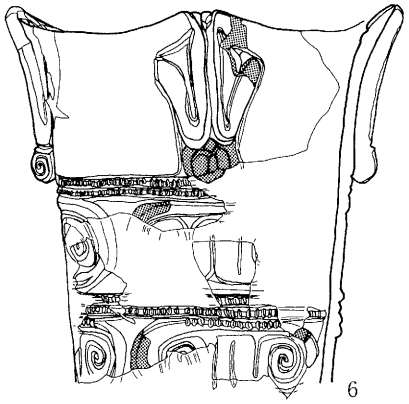
3
ⅢB４e４



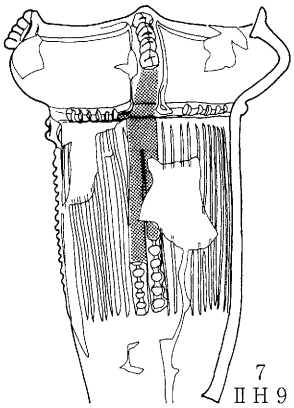
5
ⅢC６c３



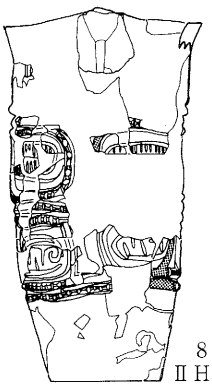
4
ⅢC６e２



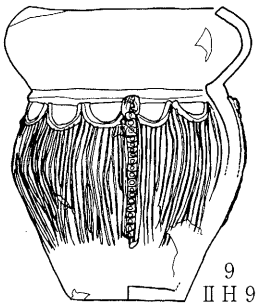
6
ⅡH９d１



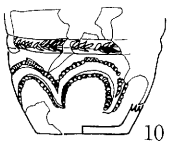
7
ⅡH９d１



8
ⅡH９d１



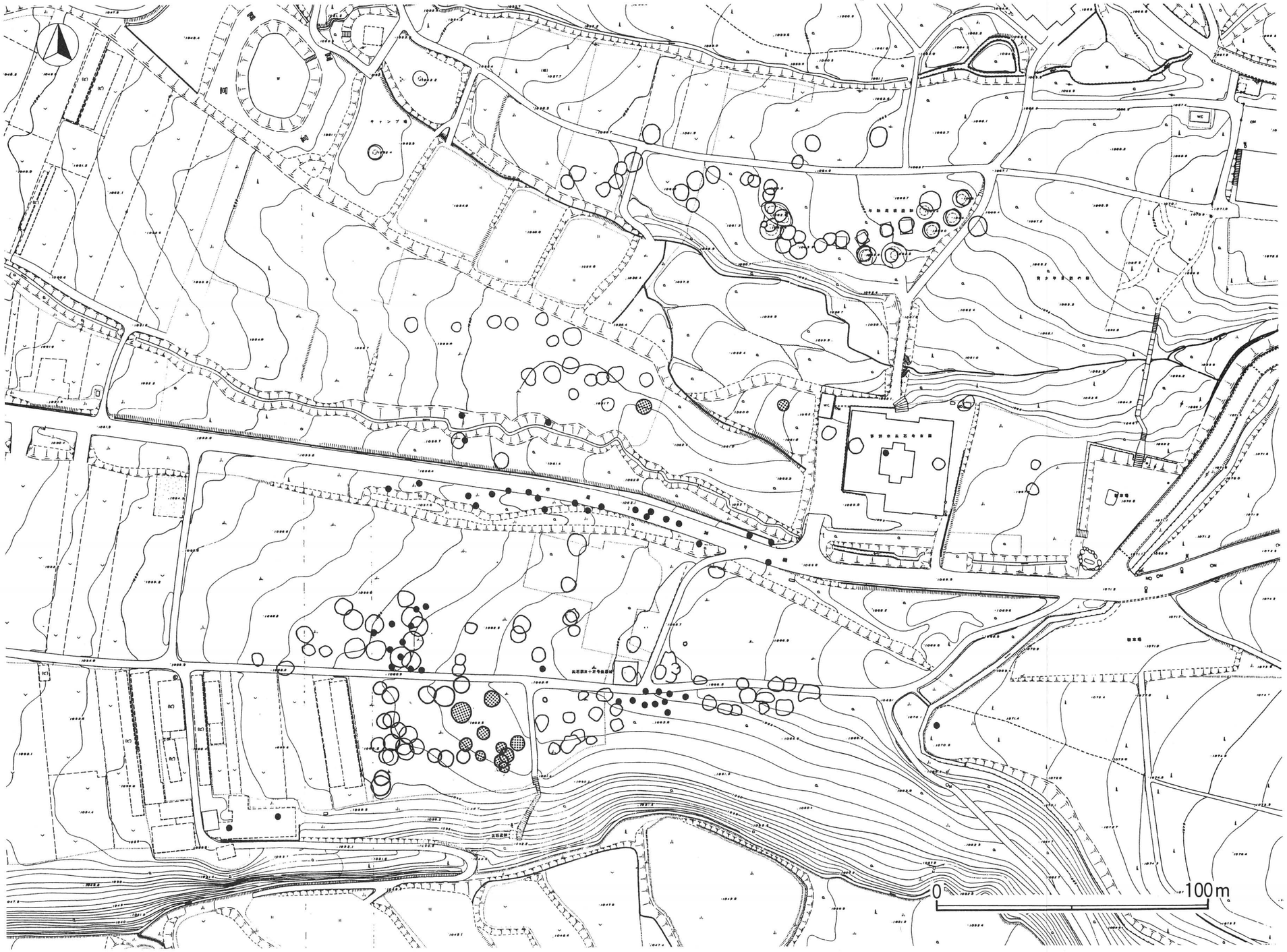
9
ⅡH９d１



10
ⅡH９d５

0 20cm

第17図　出土遺物（1/6）




第18図　遺構分布図（1/1,500）

# 第4章　ま　と　め

茅野市教育委員会では、平成２年度から尖石遺跡整備のための事前の遺構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、昨年度調査ができなかった尖石地区南側の残りと考古館西側である。

これらの地区は、どちらも宮坂英弐氏が全く調査を行ったことのない箇所であるが、南側は、これまでの試掘調査の成果からも、縄文時代中期前半の集落と後半の集落の接点となっている箇所であり、多くの遺構の検出が予想されるところであった。また、考古館の西側は、与助尾根地区との間の谷に向かう、北向きの斜面に当たり、範囲内には湧水もあることから、住居址などの遺構ではなく、水場などの特殊な遺構の検出が期待された。また、遺物も木製品など、台地上ではなかなか出土しない貴重な資料や植物遺体が出土するのではないかとの期待もあった。

どちらも今後の尖石遺跡の整備を進めるにあたって、復元する住居の選定や、仮設してある園路の設計に欠かせない重要な地点でもあった。

その重要な地点の調査を行うにあたって、遺構の位置とプランを確認する作業、さらに遺構の時期を確認するため、今回も前年度同様、計画したグリッドの中を徹底的に調査し、遺構の性格を把握することとした。

計画では、調査対象面積を約2,000㎡、調査面積はその1/5の400㎡を考え、２ｍ四方のグリッドを100箇所設定した。しかし、尖石地区南側の調査は順調であったものの、考古館の西側は林の中の調査で、立木の間を調査したことに加え、湧水のため、思うように調査が進まず、最終的にはグリッド数にして86箇所、344㎡の調査となった。

調査の成果については、本文で詳述したが、縄文時代中期の住居址が10基検出されたほか、土坑や柱穴になると考えられる遺構も多数検出されるなど、大きな成果を得ることができた。

しかし、遺構の数に比して出土資料が意外と少なく、復元可能な縄文土器も少なかったため、住居址の時期を確定できていない住居址も多い。今後さらに検討を続けたい。

尖石地区南側では８基の住居址を検出した。遺構の分布については、遺跡西側に多く分布する中期前半の集落と、東側に多く分布する中期後半の集落との接点になっており双方の時期の住居址が検出されたが、中期前半の住居址はこれより東では検出されていないことから、今年度検出した住居址がその東端になるものと考えられる。

考古館西側の調査は、調査範囲の西端で、平成５年度に調査した尖石地区北側集落の東端になると考えられる住居址を１期検出できたほか、東端では、考古館から続く与助尾根南遺跡集落における西端を確認することができた。

今年度の調査で尖石地区の南斜面や未買収地、新たに発見した南斜面から降りた一段低い箇所の調査を残しながらも、ほぼ全域の試掘調査を行ったことになる。毎年の試掘調査の目的によって、調査区をかなり離して設定した年もあり、これまで調査を行った地区内にも、まだ多くの住居址が未発見のまま存在している可能性はあるが、今後もこれらの調査を続けながらも、史跡整備のための調査に移行していきたいと考えている。

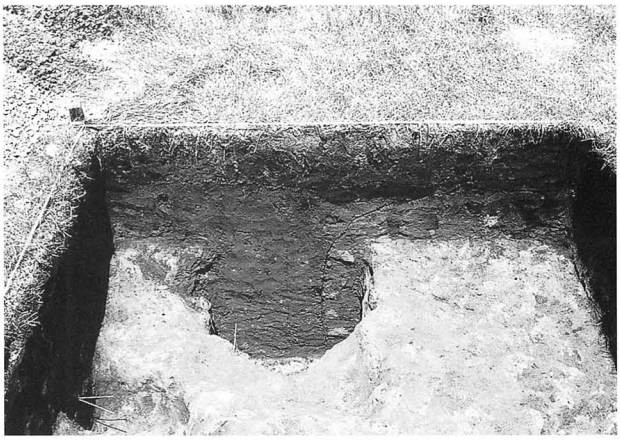
# 図　　版

1　遺跡遠景　尖石地区南側（南東から）

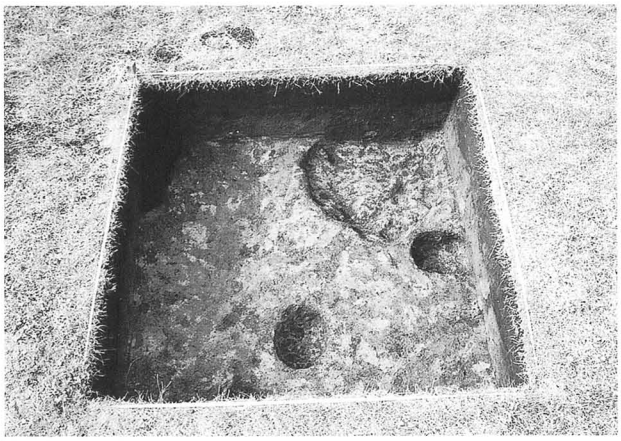
2　作業風景　考古館西側（東から）

図版２

１　ⅢＢ４ｂ３完掘（南から）

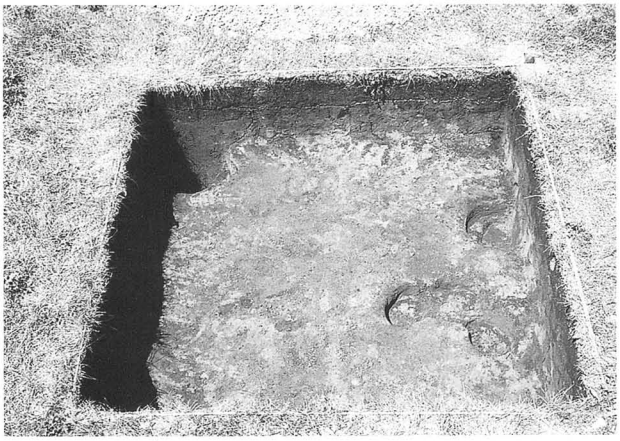


２　ⅢＢ４ｂ３北壁断面（南から）



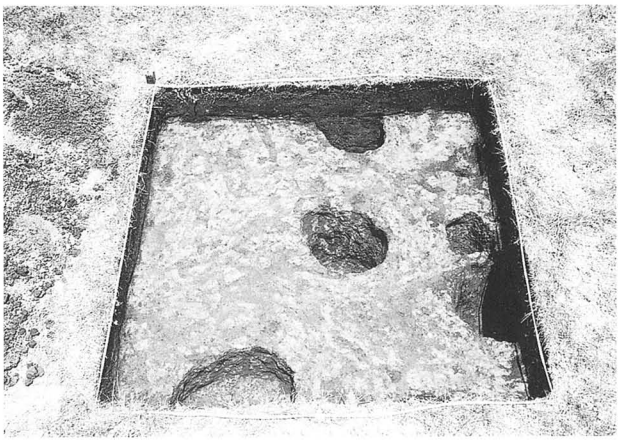
３　ⅢＢ５ｂ２完掘（南から）

４　ⅢＢ５ｂ２完掘（東から）

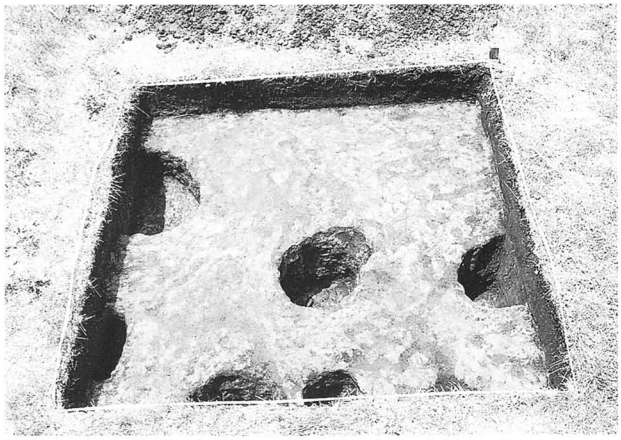


５　ⅢＢ６ｂ１完掘（東から）

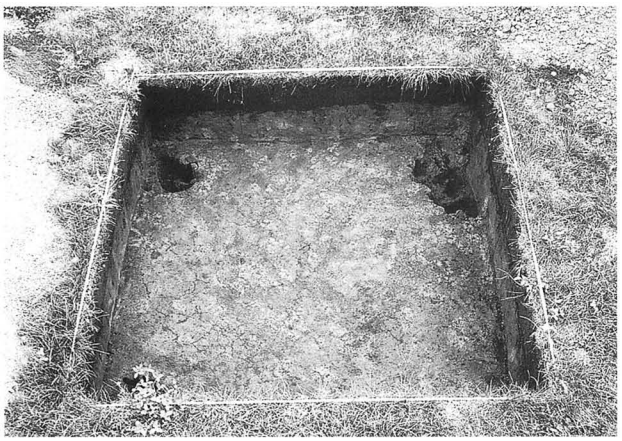
６　ⅢＢ６ｂ１南西隅ピット（北東から）



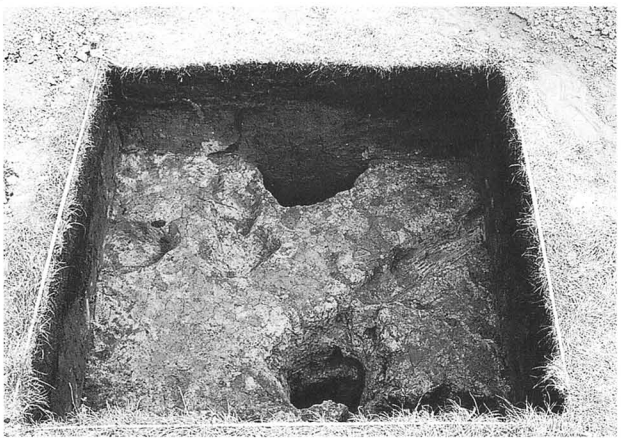
７　ⅢＢ６ｂ５完掘（南から）



８　ⅢＢ６ｂ５完掘（東から）

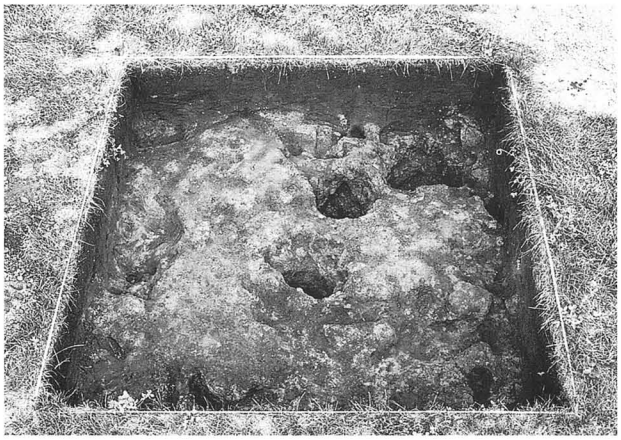


1　ⅢＢ４ｃ５完掘（南から）



2　ⅢＢ５ｃ４完掘（南から）

3　ⅢＢ５ｃ４完掘（北から）



4　ⅢＢ６ｃ３完掘（南から）

5　ⅢＢ４ｅ２完掘（北から）

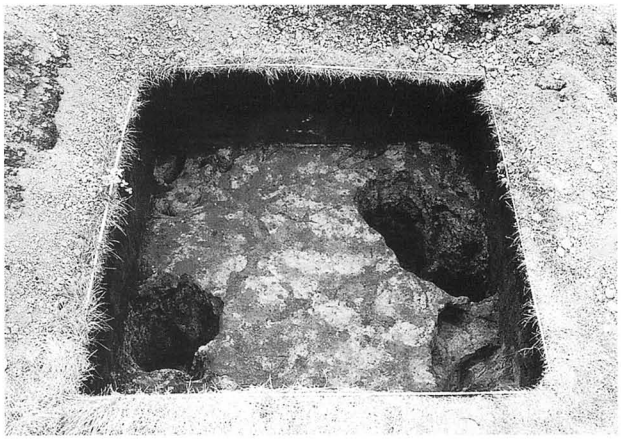
6　ⅢＢ４ｅ２南東隅ピット（北から）

7　ⅢＢ４ｅ４完掘（東から）

8　ⅢＢ５ｅ１完掘（北から）

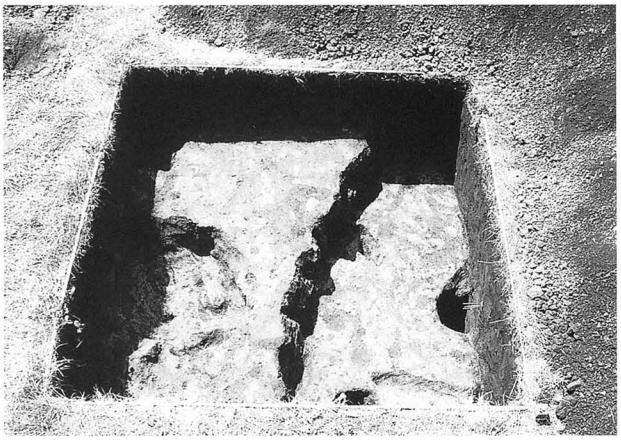
図版４

1　ⅢＢ５ｅ３北側ピット半裁（南東から）

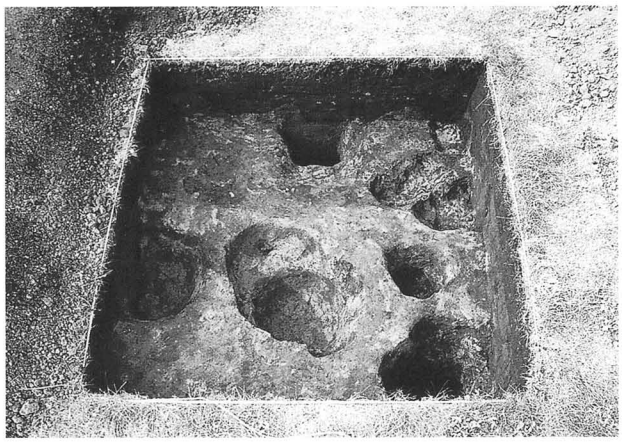


2　ⅢＢ５ｅ３完掘（東から）

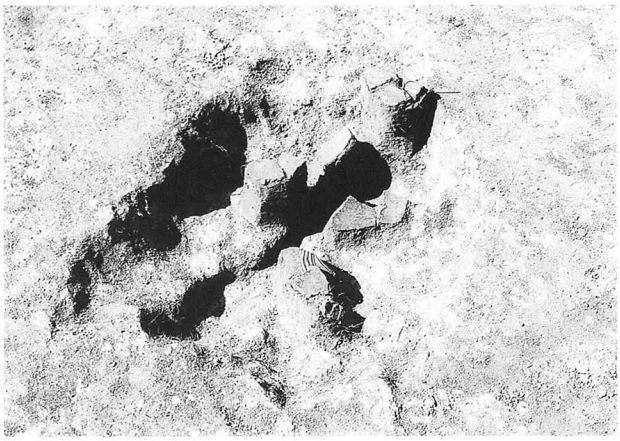
3　ⅢＢ５ｅ５完掘（南から）



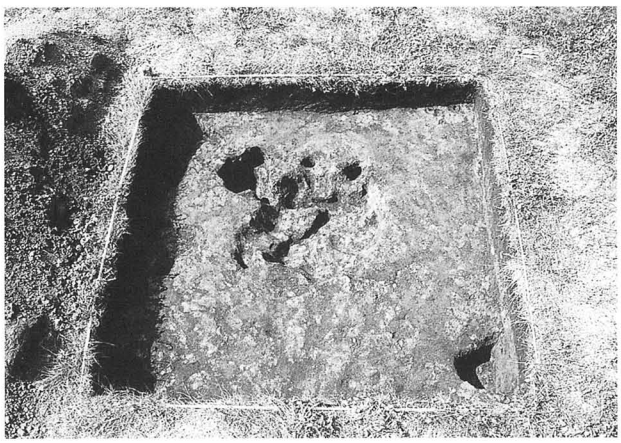
4　ⅢＢ５ｅ５完掘（北から）



5　ⅢＢ６ｅ２完掘（南から）



6　ⅢＢ６ｅ４土器出土状態（南から）

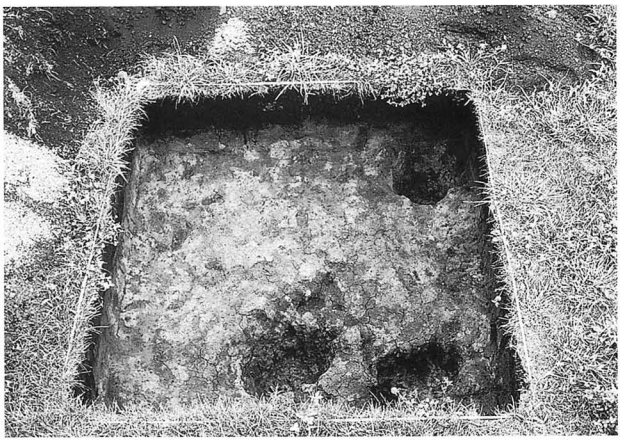


7　ⅢＢ６ｅ４完掘（南から）

8　ⅢＢ７ｅ１完掘（東から）

１　ⅢＣ４ｂ３完掘（南から）

２　ⅢＣ４ｂ３完掘（東から）



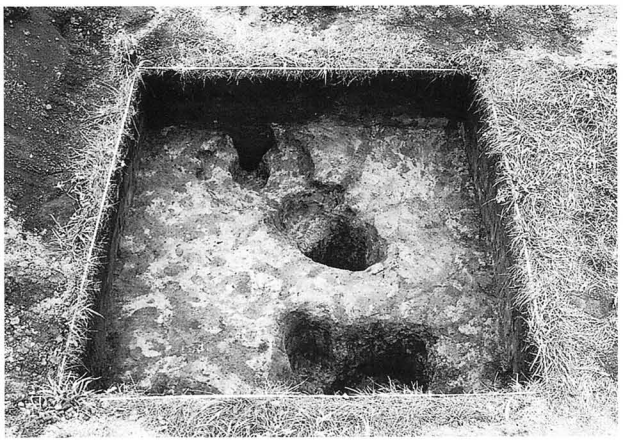
３　ⅢＣ５ｂ２完掘（南から）

４　ⅢＣ６ｂ１完掘（東から）

５　ⅢＣ６ｂ５石囲炉（南から）

６　ⅢＣ６ｂ５完掘（南から）

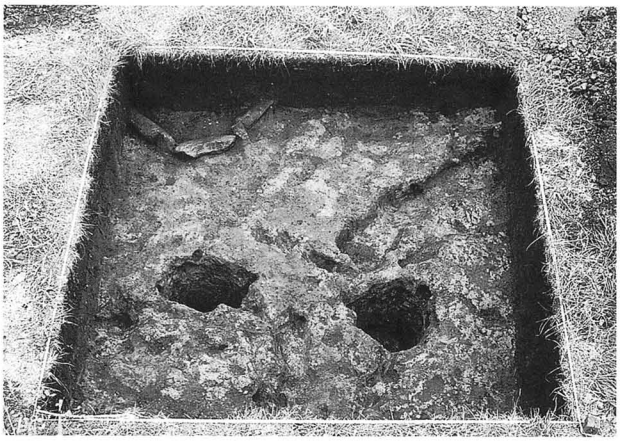
７　ⅢＣ４ｃ５完掘（南から）



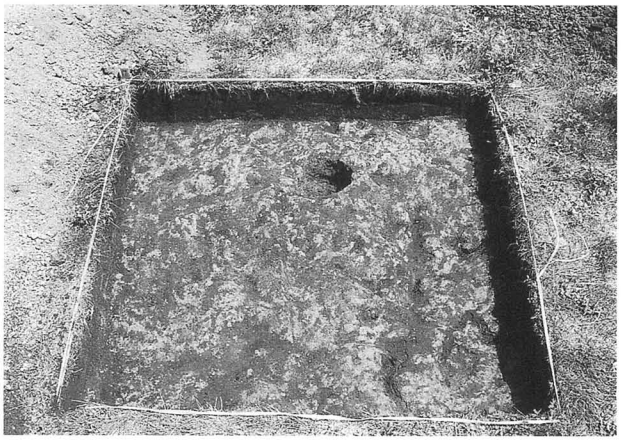
８　ⅢＣ５ｃ４完掘（南から）

図版６

１　ⅢＣ６ｃ３完掘（南から）



２　ⅢＣ６ｃ３完掘（北から）



３　ⅢＣ７ｃ２完掘（南から）

４　ⅢＣ４ｅ４完掘（南から）

５　ⅢＣ５ｅ１完掘（南から）

６　ⅢＣ５ｅ５完掘（北から）

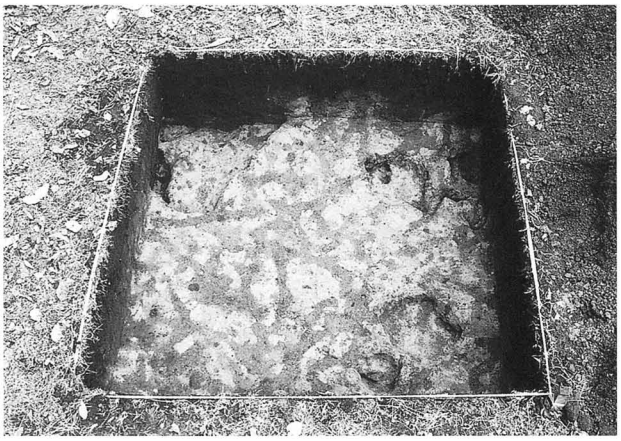
７　ⅢＣ６ｅ２遺物出土状態（西から）

８　ⅢＣ６ｅ２完掘（南から）

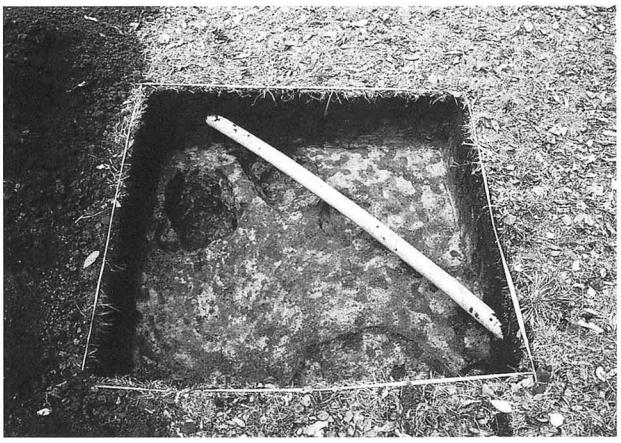
1　ⅡＨ９ａ１遺物出土状態(1)（東から）

2　ⅡＨ９ａ１遺物出土状態(2)（東から）

3　ⅡＨ９ａ１完掘（東から）



4　ⅡＨ９ａ３完掘（北から）



5　ⅡＨ９ａ５完掘（南から）

6　ⅡＨ10ｃ２完掘（北から）

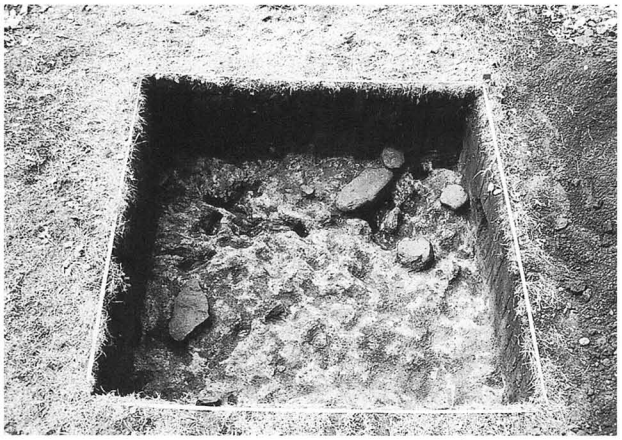
7　ⅡＨ９ｄ１遺物出土状態(1)（東から）

8　ⅡＨ９ｄ１遺物出土状態(2)（東南から）

図版８

１　ⅡＨ９ｄ１遺物出土状態(3)（東から）

２　ⅡＨ９ｄ１遺物出土状態(4)（西から）

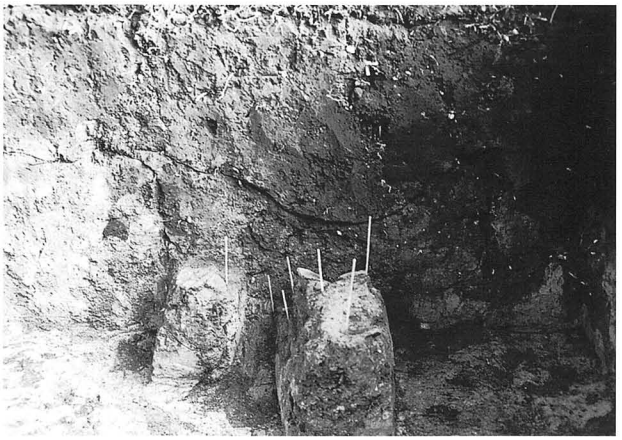


３　ⅡＨ９ｄ１完掘（東から）

４　ⅡＨ９ｄ３完掘（北から）

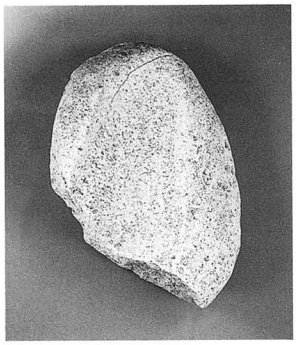
５　ⅡＨ９ｄ５完掘（南から）

６　ⅡＩ９ｂ４完掘（東から）

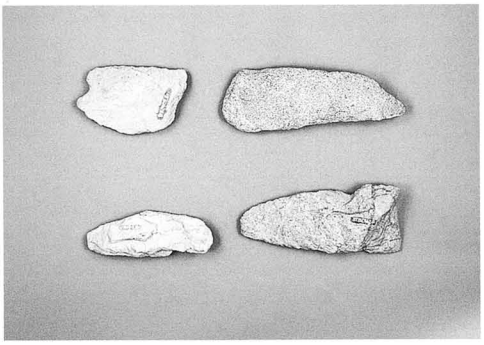


７　ⅡＩ９ｂ４遺構遺物検出状態（北から）

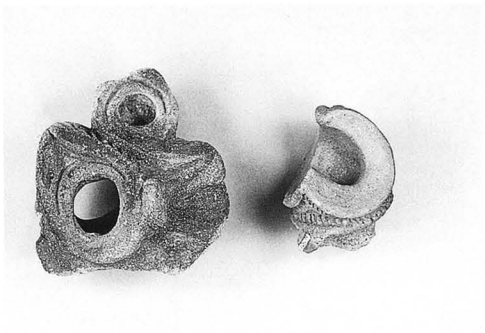
８　ⅡＭ９ｅ１遺物出土状態（西から）



1　1号住居址出土石皿

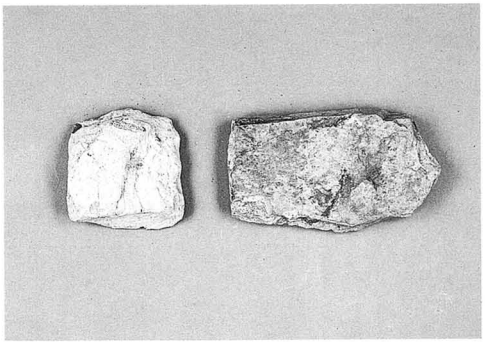


2　1号住居址出土石器



3　2号住居址出土土器(1)

4　2号住居址出土土器(2)



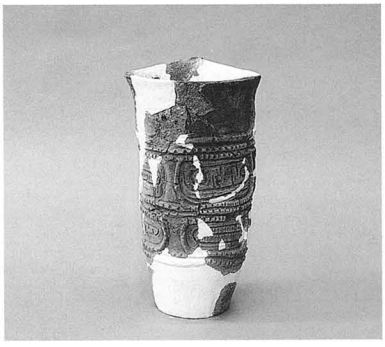
5　3号住居址出土石器

6　4号住居址出土土器

7　6号住居址出土土器

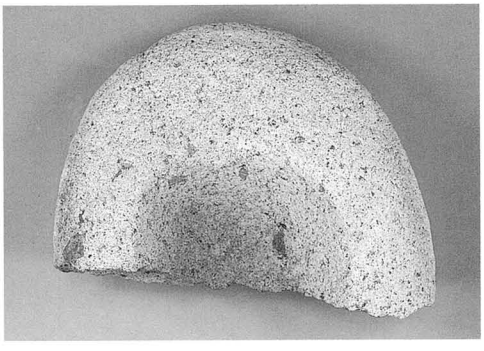
8　9号住居址出土土器(1)

9　9号住居址出土土器(2)



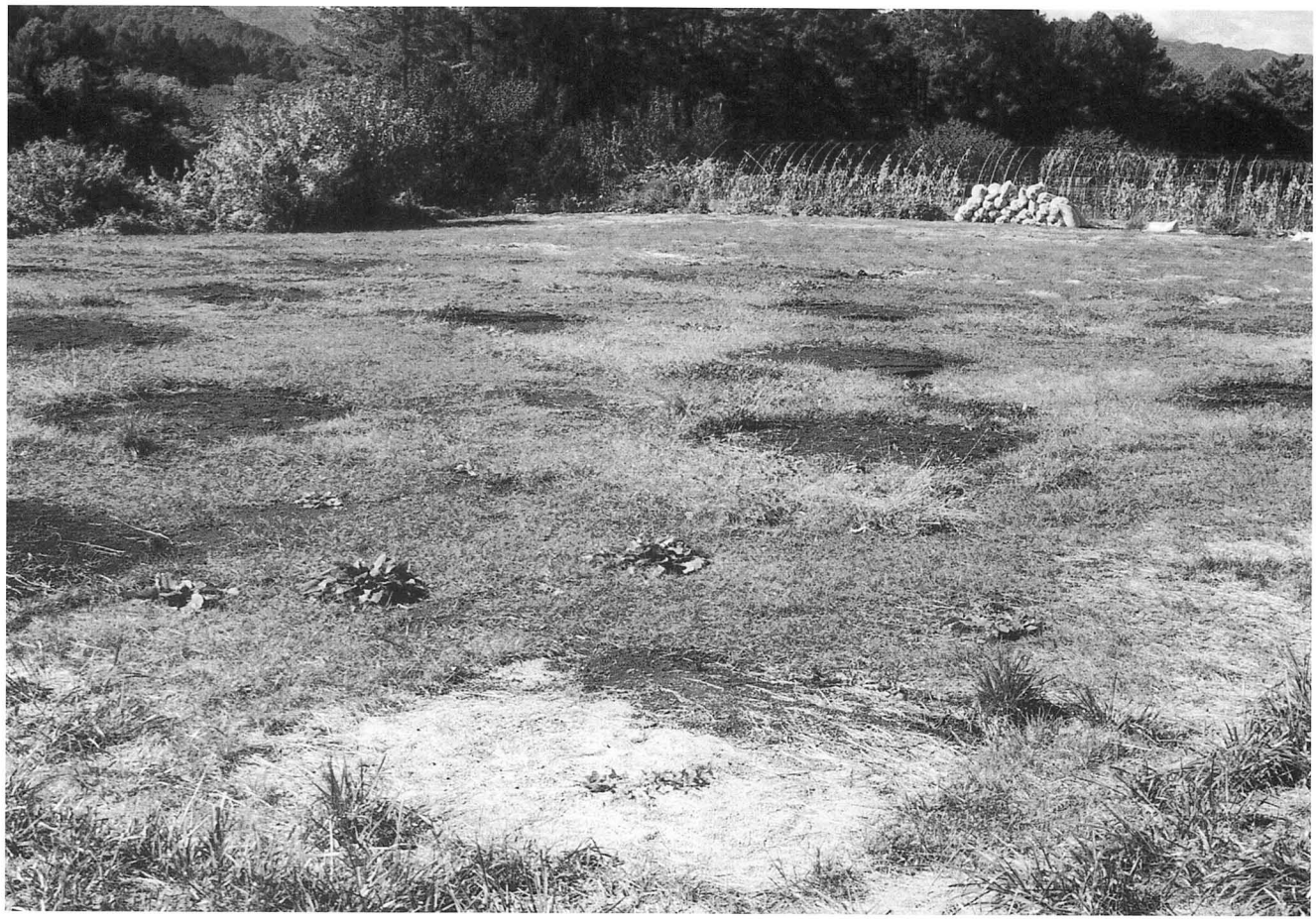
10　9号住居址出土土器(3)

11　9号住居址出土土器(4)



12　9号住居址出土石皿

図版10



1　尖石地区南側埋め戻し状態（北東から）

2　考古館西埋め戻し状態（東から）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | とくべつしせきとがりいしいせき |
| 書名 | 特別史跡尖石遺跡 |
| 副書名 | 平成14年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 小林　深志 |
| 編集機関 | 茅野市教育委員会尖石縄文考古館 |
| 所在地 | 〒391－0213　長野県茅野豊平4734－132　　TEL0266－76－2270 |
| 発行年月日 | 西暦2003年３月27日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 尖石遺跡（とがりいしいせき） | 茅野市豊平（ちのしとよひら）東嶽（ひがしだけ）4,734－125他 | 20214 | 87 | 36°<br>0′<br>36″ | 138°<br>6′<br>40″ | 平成14年<br>7月9日<br>～<br>10月31日 | 344m² | 記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 尖石遺跡（とがりいしいせき） | 集落跡 | 縄文時代<br>中期 | 住居址　10基<br>土坑・柱穴　151基 | 縄文土器　6点<br>石器　多数 | |

# 尖石遺跡

——平成14年度記念物保存修理事業
（環境整備）に係る試掘調査報告書——

平成15年３月27日　印刷
平成15年３月27日　発行

編集
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番地１号
（0266）72－2101

印刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-５